『120分 de 法華経！』

vol.32 Nov.2026

—— Let's embark on a journey to discover our own "perspective on the Lotus Sutra"!

（"法華経観"を見つける旅に出よう！）

『仏説観普賢菩薩行法経』

○『又如来の滅度の後に、若し人あって妙法華経の乃至一偈・一句を聞いて一念も随喜せん者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を与え授く』（法師品　二〇二頁 終五行）

○『其の習學せざる者は　此れを曉了すること能わじ』（方便品　八十二頁 四行）

○「習学」の３つのステップ「聞解・思惟・修習」

○『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと知れ』（法師品　二〇九頁 三行）

○『十分の一でも実践できれば、また一つでも徹することができれば、立派な精進』

◇　◇　◇

＜仏説観普賢菩薩行法経のあらすじ＞

【釈尊が、死期が迫ったことを会衆(えしゅう)に告げる】——

【三九一頁 一行】（『是（かく）の如きを我聞（われ き）ききき』）私はこのように聞いております。

仏さまが毗舎離国（びしゃり こく）の大林精舎（だいりんしょうじゃ）におられた時、大講堂において多くの比丘たちに仰（おお）せになりました。

【三九一頁 二行】（『却（さ）って後（のち）三月（みつき）あって、我當（われ まさ）に般涅槃（はつねはん）すべし』）「私はあと**三ヶ月後にこの世を去る**であろう」

【三九一頁 二行】その重大発言を聞いた**阿難(あなん)尊者**は立ち上がり、深々と礼拝しました。そして仏さまのご尊顔をじっと仰（あお）ぎ見ました。さらに長老の**摩訶迦葉(まか かしょう)**も**弥勒(みろく)菩薩**も同じく立ち上がり、仏さまのご尊顔（そんがん）をまじろぎもせず仰ぎ見るのでした。

【阿難、魔訶迦葉、弥勒菩薩が、釈尊滅後における仏弟子の心構えを問う】——

【三九一頁 六行】やがて**阿難(あなん)尊者、魔訶迦葉(まかかしょう)、弥勒(みろく)菩薩**の三人は、口をそ

ろえて申し上げました。
（『如來の滅後に云何（いかに）してか衆生、菩薩の心を起し、大乘方等（ほうどう）經典を修行し、正念に一實（いちじつ）の境界を思惟（しゆい）せん』）「世尊よ。如来が滅度されたら、衆生はどのようにすれば**『菩薩の心』**を起こすことができるのでしょうか。しかも全ての者が**『仏さまと一体となる境地』**を定めるためにはどのようにすれば宜しいのでしょうか」
【三九一頁 終三行】「**最高の仏の智慧**を得たいと願い、／（『煩惱（ぼんのう）を斷（だん）ぜず五欲を離れずして、諸根（しょこん）を淨（きよ）め諸罪を滅除（めつじょ）することを得（え）』）**『煩悩を捨てることなく**五欲にまみれた現実の世界で**心身を清め』**、／（『父母所生（ぶもしょしょう）の清淨の常の眼（まなこ）、五欲を斷ぜずして、而（しか）も能（よ）く諸（もろもろ）の障外（しょうげ）の事（じ）を見ることを得べき』）しかも現実の生身（なまみ）の体で、真実を見ることができる（**生まれながらにして生まれ変われる**）のでしょうか」

【仏滅後、『煩悩を捨てることなく身心(罪業)を清める法』を釈尊が示す】――
【三九二頁 二行】すると**釈迦牟尼仏**は**阿難たち**に仰せになりました。
「よいですか。しっかりと聞くのです。そして、よくよく深く受け止めなければなりません」
【三九二頁 二行】「私は耆闍崛山（ぎしゃくせん・**靈鷲山**りょうじゅうせん）だけでなく、あらゆる所で真実の教えを説いてきましたが、未来世で大乘の教えを願う者や、普賢菩薩のように法の実践を願う者たちのために、ここで深く説くことにしましょう。／（『罪數（ざいしゅ）を除却（じょきゃく）せんこと、今汝等（なんだち）が爲（ため）に當（まさ）に廣（ひろ）く分別（ふんべつ）すべし』）これまでの**罪業(ざいごう)を清めるためには、何を実践すれば良いか**。その教えの全てを説くことにしましょう」

【三九二頁 終四行】「阿難よ。男女の出家・在家の修行者、鬼神（きじん）、衆生の中で大乘の教えを願い、修行しようとする者、多くの人々を救おうと願う者、普賢菩薩を手本としたいと願う者、**多宝塔**を見たいと願う者（一切衆生が仏性を具えていることを知りたいと願う者）、**久遠本仏**および**分身仏**を見たいと願う者（本仏に生かされているということを自覚したいと願う者）、六根を清めたいと願う者は、次に説く**『ものの見方(観法・かんぽう)』**を具えなければなりません」

【『煩悩を捨てることなく身心(罪業)を清める法』の手順❶／まずは『懺悔』】――
【三九三頁 一行】❶「その観法（かんぽう）とは、**懺悔によって心を浄めるというもの**で、あらゆるものを清く見ることができます。／（『但（ただ）誦持（じゅじ）するが故（ゆえ）に～ 三七日に至れば普賢を見ることを得（う）』）**仏の教えを受持・読誦するだけで**、心は大乘の教えに集中することができ、しかも二十一日間（三七日）読誦を徹し続けるならば、普賢菩薩を見ることができるでしょう」
【三九三頁 三行】「業障（ごうしょう）深き者は四十九日（七七日）後。さらに業の深い者は次の世に生まれ変わってから。そしてそれ以上に業障の深い者は三度生まれ変わった時に普賢菩薩を見る境地に達するでしょう」
【三九三頁 七行】「普賢菩薩は無限に大きく、声が及ぶ範囲は無限です。しかし、この娑婆世界で人間を救おうとする時、普賢菩薩の無限大の身は小さくなり、人間の大きさに合わせて現われます(**その人に合わせて現われる**)」

【『煩悩を捨てることなく身心(罪業)を清める法』の手順❷／『六波羅蜜』】――

【三九三頁 終五行】「娑婆世界である地球上の人たちは貪・瞋・痴（とん・じん・ち）の三毒の業が深いため、普賢菩薩は智慧の力によってわかりやすく人間の姿になって**『純粋さと実践力』**の象徴である**白象**に乗って出現します。象は**『六波羅蜜の実践』**を象徴する**六本の牙(きば)**を持ち、**『七戒(不殺生・不偸盗・不邪淫・不妄語・不悪口・不綺語・不両舌)』**を象徴する**七本の足**で地上にしっかりと立ち、**七つの蓮の華**を咲かせます。象は純白色で、水晶のような雪で覆（おお）われている頗梨雪山（はりせつせん）の美しさも及びません。象の身の丈は四百五十由旬（ゆじゅん）に及ぶ巨大なもので、六本の牙の先には六つの池があり、それぞれの池には**十四の蓮華**が一面に咲き誇っています。象の鼻にも華が咲き、茎は赤い真珠の輝きをしており、／（『其の華金色（はな こんじき）にして含（つぼ）んで未（いま）だ敷（ひら）けず』）金色（こんじき）の華が**つぼみの状態**で開花を待っています」

【『煩悩を捨てず身心を清める法』の手順❸／『懺悔』し、必ず教えを深く思惟】――

【三九四頁 六行】❸「この状態が見えたならば、／（『是（こ）の事（じ）を見已（みおわ）って復更（また さら）に懺悔し、至心（ししん）に①諦観（たいかん）して大乗を②思惟（しゆい）すること～ 即（すなわ）ち敷（ひら）け金色（こんじき）に金光あり』）懺悔の心で自身を振り返えりましょう。金色（こんじき）の華が開花せず**つぼみの状態**でいるのは、**まだ自分の信仰心が至らないため**だと振り返ることが大切です。そして、心深く反省し、ものごとを**①諦(あきら)かに見つめ(諦観・たいかんする)**、**②大乗の教えに照らし合わせて思い(思惟する)を巡らせるならば**、その金色の華は開花し、輝く金色の光を放ちます」

【懺悔を行なう『功徳』とは】

真理が六根(すべての体中)に入り込んでいく。理想を追いつつも実際に成果が現れる――

【三九四頁 七行】「その蓮華台は甄叔迦宝（けんしゅくかほう/ルビー）や妙梵摩尼（みょうぼんまに/スターサファイヤ）という宝石でできており、雄（お）しべと雌（め）しべは金剛石（こんごうせき/ダイヤモンド）でできています。そして仏の化身として現われた化仏（けぶつ）がその蓮華台の中央に坐し、多くの菩薩方がその雄しべと雌しべの上に座っています。化仏（けぶつ）の眉間からは金色（こんじき）の光が放たれ、その光は象の鼻の中へ入り、さらにその光は赤い蓮華の色となって鼻から放たれ、次に象の眼の中に入って行きます。そして再び眼から光を放ち、今度は象の耳の中に入り、そして耳から放たれ、象の頭の頂上を照らし出しました。その光は形となって黄金の台座が作り出されたのでありました」**(六根が浄まっているさまを表わす)**

【三九四頁 終行】「象の頭上には仏と菩薩が神通力による三人の化人（けにん）がいます。それぞれが金輪（こんりん）、魔尼珠（まにしゅ）という宝石、そして邪（じゃ）を破る金剛杵（こんごうしょ）を携（たずさ）えています。そしてその金剛杵（こんごうしょ）を高く掲（かか）げると、象は歩き出すのです。／（『脚地（あし じ）を履（ふ）まず、虚（そら）を躡（ふ）んで遊ぶ。地を離るること七尺、地に印文（いんもん）あり。』）象は大地を踏まず、地上から七尺（約2メートル）の**空中を歩き**ます。しかし**地上には象の足の裏にある印文(いんもん)**がしっかりと映し出されます。**(『理想』を追いつつも、『実際』に『成果』が現れる)**／（『印文（いんもん）の中に於て千輻轂輞（せんぶく こくもう）皆悉（みな ことごと）く具足せり』）その印文（いんもん）には、仏の足の裏にある**『法輪の模様』**が写し出されるのでした。**(『仏さまがたどられた足跡』を、そのままたどる)** そ

れぞれの**『法輪の模様』**の中に大きな蓮の華が現われ、蓮華の上に小さな象がいます。その小さな象にも七本の足があり、大象のあとをついて歩き回ります。そして足をあげおろす度に、七千の小さな象が生まれ、それらを率（ひき）いて行くのでした」

【三九五頁 六行】「象の鼻は赤い蓮華のように光り、上にいる化仏（けぶつ）の眉間（みけん）から金色（こんじき）の光が放たれました。光は象の鼻の中に入り、鼻から出て眼へ、眼から耳へ、耳から頭へと流れ、最後に頭から背中へと流れて金の鞍（くら）となりました。金の鞍には七宝（しっぽう）の柱が立ち、宝石で飾られた台座や摩尼珠（まにしゅ）という宝石でできた蓮華台があります。

【懺悔によって、普賢菩薩を観ずる（真理と一体となる）】――

【三九五頁 終行】「そこに**『普賢菩薩』**が結跏趺坐（けっかふざ）しています。体の色は白玉（びゃくぎょく）のように透（す）き通り、五十種の美しい光が輝いてます。頭上は円光（えんこう）が輝き、全身の毛穴からは無数の光が放たれ、光の先端には多くの菩薩が付き従った化仏（けぶつ）がいます。象はゆっくりと歩み、宝石の蓮華の花びらが降り注いでいます。そして**仏の教えを行する者の前に現れる**のでした。象が口を開くと、牙の上には池が現われ、美しい天女たちが音楽を奏（かな）でて歌い、全ての衆生が等しく仏になれる**大乗の教え**を、讃歎（さんたん）するのでした」

【三九六頁 六行】「その尊い光景を目にした修行者は、大歓喜をもって普賢菩薩を礼拝するでしょう。そして奥深い大乗経典を読誦し、あまねく十方世界の諸仏を礼拝し、さらに多宝仏塔と釈迦牟尼仏を礼拝して、普賢菩薩をはじめ諸々の菩薩を礼拝するでありましょう。そして次のような誓願を立てるのでした。／（『若し我宿福（われ しゅくふく）あらば應（まさ）に普賢を見たてまつるべし。願わくは尊者遍吉（そんじゃ へんきつ）、我に色身（しきしん）を示したもうべしと』）『もし私が**前世に於いて善業を積んでいる**のであれば、普賢菩薩を目（ま）の当たりにすること**(真理と一体となる)**ができるはずです。どうか普賢菩薩よ。その尊いお姿を私にお見せ下さい』と」

【仏道修行者が行う大切な『七つの要素』（仏道修行者の大切な姿勢）】――

【三九六頁 終二行】「この誓願を立てたのち、／（『晝夜（ちゅうや）六時に❶十方の佛を禮（らい）し❷懺悔の法を行じ、❸大乗經を讀（よ）み大乗經を誦（じゅ）し、❹大乗の義を思い大乗の事を念じ、❺大乗を持（たも）つ者を恭敬（くぎょう）し供養し、❻一切の人を視（み）ること猶（な）お佛の想（おもい）の如くし、❼諸（もろもろ）の衆生に於て父母（ぶも）の想（おもい）の如くせよ』）昼夜六回にわたって❶十方の**仏を礼拝**し、❷**『懺悔の実践』**を通して自らを省（かえり）み、❸**大乗の教え**を誦（そらん）じてその意義をかみ締め、❹**大乗の精神**を心に深く念じて思いを定め、❺大乗の教えを**実践する者を讃歎(さんたん)**して、❻一切の人々を見る時、**仏の心をもって見る**ようにし、❼全ての衆生に対して、**父母のような慈悲の心**をもって接しなければなりません」

【『七つの要素（仏道修行者の大切な姿勢）』を行なうことで得る功徳】

普賢菩薩を観ずる境地（真理と一体となる境地）――

【三九七頁 二行】「このような念が深く定まると、目の前に現われた普賢菩薩の眉間から大光明が放たれるでしょう。その時の普賢菩薩の御身（おんみ）は全身が紫金（しこん）に輝き、端正（たんせい）なお姿は澄（す）み切って美しく、全身には仏の徳相である三十二相の全てを具えています」

【『大光明を放ち～』 世界が金色一色に】

世界観が変わり、本質の美しさ尊さが見えてくる。――

【三九七頁 四行】（『身（み）の諸（もろもろ）の毛孔（もうく）より大光明を放ち、其の大象を照らして金色（こんじき）とならしめん』）「さらに全身の毛穴から大光明が放たれ、金色（こんじき）に輝きます。一切の化象（けぞう）も化仏（けぶつ）も皆、金色に輝きます。／（『東方無量の世界を～ 皆同じく金色（こんじき）ならん。南（なん）西（ざい）・北方・四維・上下も亦復（またまた）是（かく）の如し』）金色の光ははるか東方の世界を照らし出し、南方、西方の世界など**十方世界全てが**金色（こんじき）に変わります」

【三九七頁 七行】「すると十方世界では、菩薩が六牙（ろくげ）の白象に乗っている光景が浮かび上がりました。／（『亦普賢（また ふげん）の如く等しくして異（こと）なることあることなけん』）その姿は普賢菩薩のお姿と同じお姿です。そして、教えを護持する全ての者たちは十方世界に充満する化象の姿を、普賢菩薩の大神通力によって見ることができるでしょう」

【三九七頁 終二行】「こうして普賢菩薩の尊い姿を見ることができた者は大歓喜を覚え、次のように願いを申し上げました。『大慈大悲の尊者よ。どうか、尊い法をお説き願います』と」

【三九八頁 一行】（『❶諸（もろもろ）の菩薩等、異口同音に各（おのおの）清浄の大乗経法を説いて』）「❶すると菩薩たちは異口同音に清浄な大乗の教えを説き（人生の真の指導者は、みな同じく一つの真理・妙法を説く）、／（『❷諸（もろもろ）の偈頌（げじゅ）を作って行者を讃歎（さんだん）すべし』）❷讃歎（さんだん）の偈（げ）を以てその修行者を褒（ほ）めたたえるでしょう（修行者がひたすら法を求める心を起こせば、必ず仏、菩薩に感応・かんのうする）。／（『是れを始めて普賢菩薩を観ずる最初の境界（きょうがい）と名（なづ）く』）以上２つの境地を、**『普賢菩薩を観ずる第一の境地』**と名付けます」

【大乗の教えを念じておれば、普賢菩薩の『夢』を見るようになる】

信仰が潜在意識にまで深まり、教えの真義を閃(ひらめ)くように悟る――

【三九八頁 四行】「このような境地に達した人は、昼、夜と大乗の教えを念じておれば、／（『睡眠の中（うち）に於て、夢に普賢其の為に法を説くと見（み）ん』）たとえ眠りに就いても普賢菩薩が自分のために法を説く**夢を見る**でしょう。普賢菩薩は修行者が心安らかになるよう言葉をかけます。そして教えの真意を忘れることがないよう、温かく見守ってくれるのであります」

【三九八頁 七行】「普賢菩薩が説くこの法を聞いて、修行者はその教えの内容をしっかりと理解し、記憶して忘れることがありません。（**『普賢菩薩の夢を見る』**とは⇒**信仰が潜在意識にまで深まる**こと）／（『日日（にちにち）に是（かく）の如くして其（そ）の心漸（こころようや）く利（り）ならん』）そしてこのことを繰り返せば、心は段々と磨（みが）かれて行き、**真理の法の真意をしっかりと解る**ようになります（**『普賢菩薩の夢を見る』**とは⇒**❷真理の教えを閃・ひらめくように悟る。啓示を得る**こと）。普賢菩薩の徳は、修行者を十方世界の諸仏の境地に思い至らせるように導くでしょう。そして、普賢菩薩の教えにしたがって、何事に対しても正しい心で教えを考えるようになり、段々と心眼を得て、黄金に光り輝き、清らかで美しいお姿の東方（過去の世界）の仏を目にすることができるでありましょう」

【『一佛を見たてまつりて～』 仏はすべて同じ。真理は一つ。一仏乗の境地へ】――

【三九八頁 終二行】（『一佛（いちぶつ）を見たてまつり已（おわ）って、復（また）一佛を見たてまつらん。～ 心想

（しんそう）利なるが故に、遍（あまね）く十方の一切の諸佛を見たてまつらん』」こうして一人の仏を見ることができたら、次の仏を見ることができ、そして**次々に多くの仏を見ることができ**、世界（過去の世界）の全ての仏を見ることができるようになります。すると、その人の心は清く澄（す）み、ついには**あらゆる世界の全ての仏を見ることができる(一仏乗の境地となる)**のであります」

【『目を閉ずれば則ち見～』 現実の現象に惑(まど)う衆生は、常に反省が必要】――

【三九九頁 一行】「そして歓びはますます深まります。しかしそのような時、次のように**反省の心**を持たなければなりません。／（『大乗に因（よ）るが故に大士（だいじ）を見ることを得、～ 諸佛を見たてまつると雖（いえど）も、猶（な）お未（いま）だ了了（りょうりょう）ならず。目を閉（と）ずれば則（すなわ）ち見、目を開けば則（すなわ）ち失う』）『自分は**大乗の教えに出会えた**から菩薩をお手本として菩薩行を行うことができた。そして**菩薩行ができた**からこそ、仏さまが説く真理の教えがわかるようになり、全ての仏さまを拝することができるようになった。しかし**その境地というものは、まだまだ不確かなものにすぎない**。なぜなら、**目を閉じて心静かに精神を集中すれば、**確かに仏さまを見ることはできるが、**目を開いて現実の世界に目を向けると、**仏さまのお姿も、その説かれる教えも、どこかへ飛んで行ってしまい霞（かす）んでしまうという不確かなものにすぎない。まだまだ**自分の修行は不十分である**と、このように反省をしなければなりません」

【三九九頁 五行】「そのように反省をしたならば、五体投地（ごたいとうち）をして十方の仏を礼拝し、恭（うやうや）しく跪（ひざまず）いて、このように唱えなさい。『諸仏は、十力（じゅうりき）・無畏（むい）・十八不共法（じゅうはちぶぐほう）・大慈・大悲・**三念処(さんねんじょ)**という最高の徳を具えておられ、常に世間の中の最高の姿をされています。しかし、私たちは**どんな罪、至らなさがあるために、現実世界で仏さまを見ることができないのでしょうか**』と」

【懺悔によってえる『功徳』を再び説かれる】

六根が浄まり、陀羅尼(善を進め悪を抑える力)を得、『法華経』と一体となる――

【三九九頁 終四行】「このように唱えたならば、またさらに懺悔（さんげ）を繰り返すのです。／（『懺悔清浄（しょうじょう）なること已（おわ）りなば、普賢菩薩復更（またさら）に～ 法喜（ほうき）の樂（らく）を得ん』）その**懺悔によって心はさらに洗い浄められ、**再び普賢菩薩が現実に現われてきて、行住坐臥（ぎょうじゅうざが）、その人の傍（そば）から離れないでしょう。そして夢の中でさえも常にその教えを説いてくださり、**寝ても覚めても法を得たその喜びで包まれる**ことでありましょう」

【三九九頁 終二行】「こうして（さんしちにち/二十一日間）を過ぎると、善を進め悪を抑える力**『陀羅尼(だらに)』**を得ることができます。／（『諸佛・菩薩の所説（しょせつ）の妙法憶持（おくじ）して失わじ』）さらに諸仏、諸菩薩が説く最高の**教えをしっかりと心にとどめて、忘れることがありません**。夢のなかでも過去世の七仏のお姿を見ることができ、／（『唯（ただ）釋迦牟尼佛のみ其（そ）れが爲に法を説きたまわん』）その中で**釈迦牟尼仏のみが、**その人のために法を説かれるでありましょう。そしてその他の六仏は、釈迦牟尼仏が説いた大乗の教えを口々に讃歎するのであります」

【四〇〇頁 三行】「夢の中で諸仏を見ることができた修行者は、さらに深い歓喜を得るようになり、さらに十方の諸仏を礼拝するようになるでしょう。そして礼拝を終えた後、普賢菩薩はその人

の前にとどまって、今まで仏を見ることができなかったのは、／（『黒悪（こくあく）の一切の罪事（ざいじ）を發露（ほつろ）せしめん』）過去世からの悪業によるものであることを説いて、**一切の汚(けが)れや罪悪(ざいあく)を明るみに出す**ように薦（すす）めるでありましょう。ですから、／（『諸（もろもろ）の世尊に向（むか）いたてまつり、口に自ら發露（ほつろ）せよ』）もろもろの仏に向かって、**口に出してその罪を告白**しなければなりません」

【四〇〇頁 終行】「このようにして三七日（さんしちにち）懺悔を行えば、常に諸仏と共にいるのだという確信を持つようになり、その境地の力によって嫌なことを耳にしても目にしても、また臭いを嗅いでも六根は浄（きよ）められて行きます。／（『廣（ひろ）く説くこと妙法華經の如し』）そして様々なことを人に説いても、それは**すべて妙法蓮華経と一致する**ようになります」

【四〇一頁 三行】（『是（こ）の六根清淨を得已（えおわ）って～ 心を是（こ）の法に純（もっぱ）らにして法と相應（そうおう）せん』）「こうして六根が清まっていけば、心身は歓喜に満ちて、悪心（あくしん）などは起こらなくなり、心は**法に従った純真な状態**になります」

【四〇一頁 終二行】（『此の經を持（たも）つ者は卽（すなわ）ち佛身を持（たも）ち、卽（すなわ）ち佛事を行ずるなり。～ 諸佛の所使（しょし）なり。～ 諸佛如來の眞實の法の子（みこ）なり。～ 法種（ほっしゅ）を斷（た）たざれ』）』

「『この教えを受持する者は、**仏の身を我が身とする者**であり、**仏の代わりとなって仏が為(な)す聖業を行う者**です。まさにこの者は**諸仏世尊の使い**であります。そしてこの者は**諸仏から守護されている者**であって、諸仏如来の**『真実の法の子』**であります。ですからそなた達は、怠らず大乗の教えを実践し、広がる法の種を断ち切ってはなりません。いまこそ、この東方（過去の世界）の諸仏をはっきりと観じなければなりません』――　と諸仏はお説きになるでありましょう」

【懺悔によって得る『功徳』のつづき】

未来も浄まり、現実世界も浄まっていく。現実の世界に仏が現われる――

【四〇二頁 三行】「仏がお説きになられることを心の中で感じ取ると、その修行者は東方の全ての世界**(過去の世界)**を見ることができます。その世界の地面はまるで手のひらのように平らかで、丘や山や荊（いばら）の茂みもなく、大地は宝石でできて、黄金の境界線で囲まれています。そしてこの美しい情景は東方の世界だけでなく、十方の世界でも美しい光景が広がっています」

【四〇二頁 五行】「それらの世界には、宝石でできた樹木・宝樹（ほうじゅ）に覆（おお）われ、宝樹の下には説法の宝座（ほうざ）、師子座（ししざ）があります。その宝座（ほうざ）の一つひとつには五百の白象がいます。その白象には、みな普賢菩薩が乗っています。しかしそれを見た修行者たちは、全ての普賢菩薩を礼拝したのち、次のように述べなければなりません。

――　（『我何（われなん）の罪あってか但（ただ）寶地（ほうぢ）・寶座（ほうざ）及び寶樹（ほうじゅ）を見て、諸佛を見たてまつらざると』）『私は何の過（あやま）ちがあるために、宝樹や宝座を目にすることはできても、なぜ、**諸仏を拝見することができない**のであろう』（仏の姿が見えない）と。深く反省懺悔しなければなりません」

【四〇三頁 一行】「そうすると、一つひとつの宝座の上に仏が荘厳なお姿で端座（たんざ）されているのが見えてきます。そして大乗の教えのおかげで、次のような讃歎（さんだん）の言葉が天空から聞こえるでありましょう。『善（よ）いかな。善いかな。善男子よ。そなたは大乗の教えを実践した

その功徳によって、／（『今諸佛世尊を見たてまつることを得たりと雖（いえど）も、而（しか）も釋迦牟尼佛・分身の諸佛及び多寶佛塔を見たてまつること能（あた）わず』）よく諸仏を見ることができました。しかし、諸仏世尊を目にすることはできたが、いまだ**釈迦牟尼世尊**とその分身（ふんじん）仏、ならびに**多宝仏塔**を拝することはできていません』」

【四〇三頁 七行】「そして、以上のように心の中で反省が終わったならば、また**一心に大乗の教えを学び、懺悔を実践していくことです**。そうすると**釈迦牟尼仏**が耆闍崛山（ぎしゃくせん/霊鷲山・りょうじゅうせん）において／（『法華經を説き一實（いちじつ）の義を演（の）べたもうを見ん』）**法華経を説き、諸法実相(一実の義)を明らかにされているその場面を目(ま)の当たりにする**ことでありましょう』」

【四〇三頁 終四行】「その場面を目にすることができたならば、またさらに己の至らない所を反省し、懺悔して、ふたたび**釈迦牟尼仏を渇仰**（かつごう/強く求める）し、合掌して念じなければなりません。『釈迦牟尼世尊は、常にこの世に住しておられるお方でございます。どうかお姿をお見せください』と、このように念じることが大切なのであります」

【四〇三頁 終行】「そう念じて霊鷲山に思いを寄せると、無数の出家・在家の修行者や衆生が霊鷲山に集い、七宝（しっぽう）の光に包まれている荘厳な様子が目に見えてきます。その法会（ほうえ）の場は宝石でできた樹木、宝樹（ほうじゅ）に囲まれ、中央には宝石で作られて師子座があります。そしてその座に釈迦牟尼仏がお座りになり、／（『其の光遍（ひかりあまね）く十方世界を照らし、復（また）十方無量の世界を過（す）ぐ』）眉間から燦然（さんぜん）と光明を放ち、その光はあまねく十方世界すべてを照らし出しています。そして、その光が到達した先には、釈迦牟尼仏の分身（ふんじん）諸仏が雲のように集まり、法華経と同じ最高の真理を説いています」

【四〇四頁 四行】「分身諸仏のお一人おひとりは、紫金（しこん）の色に輝き、御身（おんみ）は計り知れなく大きく、師子座に端座（たんざ）しておられます。そして百億無量という無数の大菩薩を眷属（けんぞく）として従えています。その無数の大菩薩の行動は、すべて普賢菩薩と同じです」

【四〇四頁 六行】「十方世界の無数の諸仏、諸菩薩が、雲が集まるように集合しました。すると釈迦牟尼仏の全身から、金色の光が放たれ、その光の中に百億の化仏（けぶつ）がいます。諸々の分身仏（ふんじんぶつ）の眉間や全身から光が放たれ、その光が釈迦牟尼仏に注がれ、一つ一つの光の中に恒河沙微塵数（ごうがしゃ みじんじゅ）という無数の化仏（けぶつ）が現われました」

【修行者が自身の過去世の修行の様子を思い出す】――

【四〇四頁 終二行】 **阿難たち(弥勒菩薩、魔訶迦葉ら)**への**釈迦牟尼仏**のお説法が続きます。

「霊鷲山に集う十方分身仏の眉間（みけん）から光が放たれ、その光が釈迦牟尼仏の額（ひたい）に注ぎ込まれて、無数の仏（化仏・けぶつ）が現われました。すると、**普賢菩薩**の眉間からも光が放たれ、その光が修行者たちの心の中に注ぎ入れました（懺悔によって、本来の仏性を徹底的に洗い出す）。修行者は自分の過去世で無数百千万という**無数の仏のもとで大乗の教えを受持したことを**思い出しました。それは**『宿命通(しゅくみょうつう)』**という過去世を見通す境地に達したことを意味するのでした」

【四〇五頁 三行】「修行者たちは悟りを得たように視野が明るく広がり、悪をとどめて善を行なう力と、百千万億の人々に影響を及ぼす大きな教化力を得るのでした。そして、普段の日々でも一切の分身諸仏（しょぶつ）が宝樹のもとの師子座で端座している姿を見ることができるでありまし

ょう。瑠璃(るり)という宝石の大地に無数の蓮の華が咲いている様子を目にするでしょう。その蓮の華の一つひとつには無数の菩薩が坐し、／（『亦(また) 普賢の分身(ふんじん) の菩薩、彼(か) の衆の中に在(あ) って大乗を讃説(さんぜつ) するを見ん』）さらに普賢菩薩の分身(ふんじん)の菩薩が、大乗の教えを讃えながら人々に説き広めている姿を見るでしょう。そしてそれらの菩薩たちが法を説いたために、修行者たちの**六根は清浄**になっていくのでした」

【菩薩たちが修行者に向かって、六根を清めることを命ずる】

（※大乗経典の菩薩の姿を模範とし、自身の至らざるを省みることが必要）――

【四〇五頁 終四行】「すると菩薩の声が天空から聞こえ、心の底から響いてくるでしょう。／（『或(あるい) は説言(せつごん) あらん、汝當(なんじ まさ) に❶佛を念ずべし。～ ❷法を念ずべし～ ❸僧を念ずべし～ ❹戒を念ずべし～ ❺施を念ずべし～ ❻天を念ずべし』）その声とは❶『もっと**仏**を念じなさい』（**【仏を念ずべし】**）。❷『もっと**法**を念じなさい』（**【法を念ずべし】**）。❸『もっと**僧**を念じなさい』（**【僧を念ずべし】**）。つまり**『三宝帰依』**の大切さを教えてくれるのでした。また❹『**持戒**を大切にしなさい』（**【戒を念ずべし】**）。❺『**布施**を大切にしなさい』（**【施を念ずべし】**）。❻『**煩悩から離れた解脱の境地**を目指しなさい』（**【天を念ずべし】**）と努力することを教えてくれるでしょう。／（『此(かく) の如き六法は是(こ) れ菩提心なり、菩薩を生ずる法なり』）**この六つの教えこそ、菩提心の教え**であり、**菩薩を生む教え**であり、これらのことを忘れてはいなかったか、／（『汝今應當(なんじ いま まさ) に諸佛の前に於て、先(さき) の罪を發露(ほつろ) し至誠(しじょう) に懺悔すべし』）**仏さまに素直に告白して懺悔**しなさいと教えてくれるのでした」

【『普賢菩薩の教え』 ― 眼根(げんこん)の罪の懺悔の法】

（眼根・げんこんの罪を懺悔すると、自身の内心に反省の声が聞こえてくる） ――

【四〇六頁 二行】「懺悔をすると、心の内で次のような声が響いてくるでしょう。――『私は遠い過去世から現在まで、／（『眼根(げんこん) の因縁をもって諸色(しょしき) に貪著(とんじゃく) す』）自分にとらわれて物事を**自分中心**で見てきた。現象の善し悪しだけにとらわれ、**五官を満足することだけを追い求め、それに執着していた**。／（『色汝(しき なんじ) が眼(まなこ) を壊(やぶ) って恩愛(おんない) の奴(やっこ) となる』）まさに**現象の虜(とりこ)**になって目の前の現象に振り回され、三界(欲界・色界・無色界)をグルグルとさまよい、結局は、／（『此の弊使(へいし) を爲(もっ) て盲(もう) にして見る所なし』）心身共に疲れ果てて、いつまでたっても物事の**実相を見ることができなくなっていた**自分だった』」

【四〇六頁 五行】「『法華経では／（『十方の諸佛、色身(しきしん) 滅せずと説く。汝今(なんじ いま) 見ることを得つ』）十方諸仏は、**永遠の生命**を持つお方であると説き、私自身もまた、**永遠の生命を具えている**と教えていただいている。そのおかげで**ものの見方**が、目の前の**現象に捉われないものの見方**になってきた。しかし、本当にそのことが揺(ゆ) るぎなく完成しているであろうか。自分は現象に捉われて来た**業は深く、正しくとらえることがまだ不充分**だ。だからこそ、仏さまの教えに従い、／（『諸佛・釋迦牟尼佛に帰向(きこう) したてまつり、汝が眼根(げんこん) の所有(しょう) の罪咎(ざいぐ) を説け』）諸仏、釈迦牟尼仏への帰依心を表(あらわ) して、自分の**ものの見方**が誤っていたことを**言葉に出して懺悔しなければならない**』――と。このような声が聞こえてくるでしょう」

【眼根(げんこん)の罪を懺悔する時に唱える言葉】 ――

【四〇六頁 八行】「その声が聞こえて来たならば『諸仏・諸菩薩は智慧の眼（まなこ）で私たち衆生を平等に見て下さっている。どうか清らかな教えの水をお注ぎくださり、私たちの心の垢を洗い流すようお導きください』と念じなければなりません」

【四〇六頁 終三行】「そして十方の仏を礼拝し、次のように言わなければなりません。『（『眼根（げんこん）の重罪、障蔽穢濁（しょうへいえじょく）にして盲（もう）にして見る所無し』）私は今まで**自分中心のものの見方**でいたため**心の眼**が汚（けが）れて曇り、物事を**正しく見る**ことができませんでした。願わくは仏さまの大慈悲を賜り、私をご守護ください。一切衆生を救う普賢菩薩よ、／（『唯願（ただ ねが）わくは哀愍（あいみん）して我が眼根（げんこん）の不善・悪業障（あくごうしょう）を悔過（けか）する法を聴（ゆる）したまえ』）私が過去からの**不善のものの見方を改め、過去の悪業を洗い落とす修行に、どうかお力をください**』と願わなければなりません」

【四〇七頁 三行】「こう三度唱え、五体を投じて大乗の教えを正しく思い定め、そのことを忘れないようにしなさい。これが**眼根(げんこん)の罪**を懺悔する方法であります」

【四〇七頁 五行】「**眼根(げんこん)の罪**を清めるためには、**諸仏の名前を称(とな)え**、香を焚（た）き、華を散じて大乗の心を起こし、美しい絹、旗、天蓋（てんがい）などを捧げて、過去の自分のものの見方が誤っていたことを**告白して懺悔する**ことです。そうすればその人は現世においても釈迦牟尼仏と分身（ふんじん）の諸仏を目（ま）の当たりにし、阿僧祇劫（あそうぎ こう）という永遠の時間、悪道に堕（お）ちることはありません。大乗の教えのおかげで、悪をとどめ善を行う陀羅尼（だらに）菩薩の仲間入りをすることができるのです。こういう心でいることを**『正念』**といい、これにはずれた心を**『邪念(じゃねん)』**といいます。こうして懺悔してものの見方を改めることを／（『是（こ）れを眼根初境界（げんこん しょきょうがい）の相と名（なづ）く』）**『眼根初境界(げんこん しょきょうがい)の相**/清められた眼根の最初の境地**』**といいます」

【四〇七頁 終四行】「このように**眼根**を清めることができても、まだ満足してはいけません。さらに大乗経典を読誦し、昼夜を問わず仏さまに跪（ひざまず）いて、己の至らざることを告白して懺悔をしなければなりません。そして次のように言葉にするのです。――『私は今、釈迦牟尼仏および分身（ふんじん）の諸仏を見ることができ、**仏性の自覚**を得ることができた。しかし、これはまだ確信にまでには至っていない。それはなぜかと言うと、まだまだ**自分の眼**が曇り、**ものの見方**が汚（けが）れているためである』と懺悔をしなさい。このことを七日間、一心に行えば、ついに**多宝塔**が地面から現われるのを見るでありましょう。つまり、**仏性の確かな自覚**ができるようになるのです。すると**釈迦牟尼仏**が右手で多宝塔の扉を開け、**多宝如来**が**『普現色身(ふげんしきしん)三昧』**という**普く人々に仏性を現わす境地**に入っている姿を目にするでしょう。そのお姿は全身から恒河沙微塵数（ごうがしゃ みじんじゅ）という無数の光明が放たれ、それぞれの光の一つひとつには、百千万億という無数の化仏（けぶつ）がおられる尊いお姿が目に入ってくるでしょう」

【四〇八頁 七行】「この尊いお姿を見た修行者は無上の喜びを覚え、仏性を讃える偈を唱えながら多宝塔の周囲を七回巡り、**多宝如来**が『法の子よ。そなたは**大乗の行**を実践し、普賢菩薩を手本としてものの見方の誤りを懺悔しました。ですから私はあなたのもとに行き、あなたが気づき悟ったことが正しいことであると**《証明》**しましょう **（※ 懺悔をしたら「仏性」が開顕する）**』、『釈迦牟

尼仏よ。妙法を雨のように衆生に平等に説いてくださり、濁悪世（じょくあくせ）にいる衆生に悟りをお与えくださいました。ほんとうに素晴らしいことです』と釈尊を讃歎される大音声（だいおんしょう）を発せられのを目（ま）の当たりにします」　　**――【眼根(げんこん)の罪の懺悔】**

【『普賢菩薩の教え』 ― 耳根(にこん)の罪の懺悔の法】――

【四〇八頁 終行】すると荘厳な多宝仏塔を見た**行者たち**は、再び普賢菩薩を念じ、合掌・礼拝して／（『大師、我に悔過（けか）を教えたまえ』）『大師よ。まだ他に悔い改めることはないでしょうか。どうぞお教えください』と普賢菩薩に申し上げたのでした」

【四〇九頁 三行】「**普賢菩薩**は次のように答えます。『あなたはこれまで長い間、**耳のあやまち**を重ね、／（『外聲（げしょう）に隨逐（ずいちく）して』）**外から耳に入って来る声に引きずられ、心が引っかかり、振り回されてきました**。／（『妙音を聞く時は心に惑著（わくじゃく）を生じ』）**心地良いことを聞けば、糠(ぬか)喜びをし、それに惑わされて執着し、**／（『惡聲（あくしょう）を聞く時は百八種の煩惱の賊害を起す』）反対に**不快なことを聞けば、百八の煩悩がかき立てられて**、その人への敵対心や復讐の心が湧き、その結果、**自分の心を損(そこ)なうだけでなく相手にも危害を加える**こともありました』」

【四〇九頁 五行】「『（『惡耳（あくに）の報（ほう）、惡事を得（う）』）**悪い耳**を持てば、悪い報いを受けて必ず**悪いこと**をするようになります。／（『恒（つね）に惡聲（あくしょう）を聞いて諸の攀緣（へんえん）を生ず』）そして人の言うことを悪い方へ**悪い方へと解釈する癖がついてしまい**、そのために次から次へと迷いが増長し、**岩山を攀(よ)じ登っていくように、厳しい山路(やまじ)の人生を歩む**（『攀緣・へんえんを生ず』）ようになります。／（『顚倒（てんどう）して聽くが故に、當（まさ）に惡道・邊地（へんち）・邪見の、法を聞かざる處（ところ）に墮（だ）すべし』）つまり**転倒した心**で物事を聞くために、怒りや嫉妬というような**悪道に堕(お)ち**、仏の教えとは縁のない遠い所へ行ってしまい、ついには間違った考えに走り、**仏の教えなど耳に入らなくなってしまう**のです』と普賢菩薩は答えるのでした」

【四〇九頁 六行】「**普賢菩薩**はあらためて次のように告げます」

「『あなたは今日ようやく、海のように広く深い功徳を持つ大乗の教えを、受持し読誦することができるようになりました。それにより、十方世界の仏さまを見ることができ、多宝塔も現われて、あなたの悟りが深まったことを証明してくださいました。だからこそあなたは、／（『汝自（なんじみずか）ら當（まさ）に己（おの）が過惡（かあく）を説いて諸罪を懺悔すべし』）これまでの自分自身をしっかりと振り返り、至らない自分を**懺悔する姿勢を大切に**しなければならないのです』」

【四〇九頁 終四行】「普賢菩薩のこの言葉を聞くと、**修行者たち**は合掌し、そして五体投地（ごたいとうち）をして礼拝し、次のように申し上げました」

【四〇九頁 終二行】「完全無欠の智慧を具えておられる世尊よ。どうか私が悟りを得られるよう、悟りへの道をお示し下さい。／（『方等（ほうどう）經典は爲（に）れ慈悲の主（しゅ）なり』）この**方等経典(ほうどう きょうてん・大乗仏教の経典)は大慈悲の主**であります。どうぞ私を厳しくご覧になって、私の一つひとつの**懺悔**をお聞きとりください。私は大変長い間、**耳の業**によって間違った**物事の聞き方**をしていたために、つまらぬ執着をしてきました。それはまるで／（『惑著（わくちゃく）すること、膠

(にかわ) の草に著 (つ) くが如し』) 溶 (と) けた膠(にかわ)が草にくっついて離れないようにとらわれてしまうのです。／(『諸 (もろもろ) の悪聲 (あくしょう) を聞く時は煩惱の毒を起し』) 反対に嫌な言葉や、不快なことを聞くと、**怒りや憎しみや嫉(ねた)みなどの心がムクムクと涌(わ)き**上がり、その**不快な言葉に引きずられ、冷静な判断力を失い**、相手かまわず当たり散らすようになります。／(『此の弊聲 (へいしょう) を出 (いだ) して我が識神 (しきしん) を労 (ろう) し、三塗 (さんづ) に墜堕 (ついだ) せしむ』) そしてついには自分らも**怒声や悪口など乱れた言葉を発し**、結局は自分の**精神を苦しめ**、自ら**地獄・餓鬼・畜生**という**三つの悪道の世界**へと陥 (おちい) っていくのでした。今、**耳の罪**に気づくことができましたので、仏さまに告白し、懺悔いたします」　　**――【耳根(にこん)の罪の懺悔】**

【四一〇頁 四行】「こう**懺悔**すると、**多宝如来**が金色 (こんじき) の大光明を放つお姿が見えてきます。光は東方の世界 (過去の世界) のみならず十方世界を照らし、あらゆる世界の無数の諸仏を目にすることができます。そして**諸仏**が発する声が、東方より聞こえてきます」

【四一〇頁 六行】「『ここに**善徳(ぜんとく)**という仏さまがいます。そしてその分身仏が無数にいて、宝樹 (ほうじゅ) の木の下に端座しています』と述べるのでした。これらの諸仏は**『普賢色身三昧(ふげんしきしん ざんまい)』**という境地にいますが、一斉に口を開いて『善哉 (ぜんざい)。善哉。善男子よ。よくぞそなたたちは大乗経典を読誦しました。そなたが読誦したその教えこそ、仏の境地に導く道に他ならないのです』とお褒 (ほ) めくださるのでした」

【『普賢菩薩の教え』 ― 五根(ごこん・五官)の罪の懺悔 (鼻根をはじめとして)の法】 ――

【四一〇頁 終三行】「そう諸仏が説かれた後、**普賢菩薩**はさらに次のように懺悔の法を説き聞かせるでありましょう。『／(『汝 (なんじ) 先世 (せんぜ) 無量劫の中に於て、香 (こう) を貪 (むさぼ) るを以ての故に』) そなたは無量劫という大変長い過去世から、感覚つまり**五官の快楽を貪り続けて**きました。その結果、／(『分別諸識 (ふんべつ しょしき)、處處 (しょしょ) に貪著 (とんじゃく) して、生死 (しょうじ) に堕落 (だらく) せり』) ものごとを**正しく見極める力が鈍(にぶ)り、ただその場その場の現象にとらわれて、貪り、執着して、現象の変化に引きずり回されてしまい**、堕落した精神の持ち主になっていったのです。ですから、大乗の教えの大本とは一体何なのかをしっかりと見つめ、／(『大乗の因とは諸法實相なりと』) 大乗の教えの大本は**《諸法実相》**あるということを、あらためて見極めなければならないのです』と説くでありましょう」

【四一一頁 一行】「この言葉が聞こえたならば、また五体投地して礼拝し、懺悔をしなければなりません。そして懺悔のあと、あらためて諸仏や教えに対しての帰依の念を深め、次の言葉を唱えるのです。**『南無釈迦牟尼仏・南無多宝仏塔・南無十方釈迦牟尼仏・分身諸仏』**と」

【四一一頁 三行】「そう唱えたら、一人ひとりの仏さまに真心をもって礼拝し、香華 (こうげ) を捧げて供養しなさい。そして跪 (ひざまず) いて合掌し、偈 (げ) をもって諸仏を讃歎し、自身の**十悪業** (**じゅうあくごう** / 殺生せっしょう・偸盗ちゅうとう・邪淫じゃいん・妄語もうご・綺語きご・両舌りょうぜつ・悪口あっく・貪欲とんよく・瞋恚しんに・愚痴ぐち) を**懺悔**するのです」

【四一一頁 七行】「さらに次のように懺悔しなさい。『私は無量劫という大変長い過去世からずっと、／(『香 (こう)・味 (み)・觸 (そく) を貪 (むさぼ) って衆惡 (しゅあく) を造作 (ぞうさ) せり』) **肉体的な満足だけ**

を求めてきた(自身の「快・不快を判断の基準にしていた)。そのために、さまざまな悪業を積み重ねてまいりました。そして無量世という長い間、いつも地獄（怒り）・餓鬼（貪り）・畜生（愚かさ）という**三悪道**に陥（おちい）り、辺地（へんぢ・片寄った極端な考え）、邪見（よこしまな考え）など、様々な**不善の悪業**を心身につけてきました。ですから、／（『此（かく）の如き悪業を今日發露（こんにち ほつろ）し、諸佛正法の王に歸向（きこう）したてまつりて説罪（せつざい）懺悔すと』）これまで行って来た悪い行為を今日ただいま、**すべてをさらけ出して告白し**、正法の王である諸仏に帰依し、その**罪を懺悔いたします**』と懺悔するのです」　　**――【五根(ごこん・五官)の罪の懺悔　(鼻根をはじめとして)】**

【『普賢菩薩の教え』 ― 舌根(ぜっこん)の罪の懺悔の法】――

【四一一頁 終二行】「その懺悔が終わったならば、また一心に大乗経典を読誦しなさい。そうすると大乗経典の功徳によって、空中から次のような声が聞こえてくるでしょう」

【四一一頁 終行】「『法の子であるそなたよ。今まさに十方の仏に向かって大乗の教えを讃歎して、諸仏の御前（おんまえ）で自分の過（あやま）ちを告白しなさい。／（『諸佛如來は是（こ）れ汝が慈父なり』）諸仏如来はそなたのやさしい**父親・慈父**です。ですからそなたの告白をきっと喜んでお聞きくださるでしょう』と」

【四一二頁 二行】「（『自ら舌根の所作（しょさ）の不善惡業（ふぜんあくごう）を説くべし』）そして**自分の舌根**が作り出したこれまでの不善・悪業を、次のように告白するのです『私の**舌**は悪い心に動かされて妄語（もうご/うそ）・綺語（きご/おべんちゃら・でまかせ）・悪口（あっく/わるくち）・両舌（りょうぜつ/二枚舌）・誹謗（ひぼう/事実無根の）・妄語（もうご/うそ）・邪見（じゃけん/よこしまな見方）を大事にして、意味のない無益な言葉を弄（ろう）して、さまざまな禍（わざわい）をおこなってきました。私の**口**はそういう様々な悪業をなし、／（『鬪遘（とうこう）壞乱（えらん）し』）人と人とが、のけ者にし合い、お互いの生活を崩し合って、正しい教えを誤った教えであるなどと言いふらして、世の中を惑わせました。このような罪を犯してきたことを、今、悉（ことごと）く懺悔致します』と」

【四一二頁 六行】「そして諸仏の御前（おんまえ）で懺悔したならば、五体投地して十方の仏を礼拝し、跪（ひざまず）いて合掌して次の言葉を唱えなさい。／（『此の舌の過患（かげん）無量無邊（むへん）なり』）『**この舌の過ち**が引き起こす禍（わざわい）は計り知れないものがあります。／（『諸（もろもろ）の惡業の刺（いばら）は舌根より出（い）づ』）人を刺すような**さまざまな悪業**は、じつは**口**から出るものです。正しい教えが広まるのを断ち切る罪も**口**から起こります。／（『惡舌（あくぜつ）は功德の種を斷（だん）ず』）そのような**悪舌**は人々が功徳を積んで行くことも断ち切り、／（『非義（ひぎ）の中に於て多端（たたん）に強（し）いて説き』）真実でないことをあの手この手と強引にこじつけて言い、／（『邪見を讃歎（さんだん）すること火に薪（たきぎ）を益（ま）すが如し』）間違った考えを称賛（しょうさん）し、**まるで火の中に薪(まき)をくべるように邪見を焚(た)きつけて**いきます。／（『猶（な）お猛火（みょうか）の衆生を傷害するが如し』）その悪行は、猛火が多くの人を焼き尽くすようで。／（『毒を飲める者の瘡疣（そうゆう）なくして死するが如し』）また**毒を飲んだ人が外見は何ともなく、見えない体内で毒が体を蝕(むしば)み、もがき苦しんで死んで行く**ようなものです。／（『是（かく）の如き罪報（ざいほう）、惡邪不善（あくじゃふぜん）にして』）**舌の罪**は本当に悪であり邪です。そして**舌の罪**の報いで百劫・千劫の長きにわたり悪の道を歩み続けて行かなければなりません。／（『妄語（もうご）を以ての故に大地獄

に堕（だ）す』）**ウソをつくだけでも大地獄に堕(お)ちてしまう**のです。私は今、南方の諸仏に帰依し、私自身の過ちと罪を告白し懺悔致します』と」　　**―― 【舌根(ぜっこん)の罪の懺悔】**

【四一三頁 ニ行】「そう念じていると、空中から声が聞こえてきます。『南方に仏がいます。**栴檀徳(せんだんとく)**という名で、無量の分身仏がいます。諸仏は大乗の教えを説き、人々の罪悪を取り除いてくれます。罪を持つ者は、今こそ十方世界の無数の諸仏に向かって／（『黒悪（こくあく）を發露（ほつろ）し誠心（じょうしん）に懺悔せよ』）自分の奥深い邪悪を素直に告白して懺悔するのです』と告げるのでした。そしてその声を聞いたならば、五体投地して諸仏を礼拝しなければなりません」

【懺悔の功徳 ―『大慈悲心』を持つ】――

【四一三頁 七行】「この時、諸仏は大光明を放って修行者を照らし出しました。修行者は全身に喜びを感じ、／（『大慈悲を發（おこ）し普（あまね）く一切を念ぜしめん』）**大きな慈悲心を持ち**、一切の人々の幸せを念ずる心が持つようになりました。諸仏はその修行者に、**大慈悲の精神**と身を捨て人と共に喜ぶという**『喜捨』**の教えを説くのでした。そして**愛語**の大切さ、**『六和敬(ろくわきょう)』**(信仰者同士が和合し合い、敬い合うことを説いた教え /身和敬･しんわきょう/口和敬･くわきょう/意和敬/戒和敬/見和敬/行和敬)の教えをお説きになります。修行者はその教えを聞いて大いに感激し、その教えを称え、かみ締めて、精進を怠けるということはなくなるでありましょう。そして再び空中から声が響きわたり、『さらに懺悔をするのですよ』と語りかけるでありましょう」　　**―― 【懺悔の功徳】**

【『普賢菩薩の教え』 ― 身根(しんこん)･意根(いこん)の罪の懺悔の法】――

【四一四頁 一行】「空中からの声はさらに続きます。／（『身とは殺（せつ）・盗（とう）・婬（いん）、心とは諸（もろもろ）の不善を念ずる』）『**身の罪**とは、殺生（せっしょう）・偸盗（ちゅうとう／盗み）・邪淫（じゃいん／淫らな男女関係）です。**心の罪**とは、あらゆる悪いことを考えることです。そして**十の悪業**（**十悪業**／殺生せっしょう・偸盗ちゅうとう・邪淫じゃいん・妄語もうご・綺語きご・両舌りょうぜつ・悪口あっく・貪欲とんよく・瞋恚しんに・愚痴ぐち）や地獄へ落ちる**五逆罪**（**ごぎゃくざい･五無間ごむけん**／父を殺す罪・母を殺す罪・聖者阿羅漢あらかん)を殺す罪・仏の身を傷つける罪・仏弟子の和合を壊す罪）という大罪を犯すのです。／（『猶（な）お猿猴（おんこう）の如く、亦（また）鱢膠（ちきょう）の如く、處處（しょしょ）に貪著（とんじゃく）して遍（あまね）く一切六情根の中に至る』）そういう**身と心の罪**は、まるで猿が枝から枝へと飛び移るように、また、鳥黐（とりもち）があちこちに引っ付くように、次から次へと**執着の心が引っ付き、六根のすべてに毒気が沁(し)み渡って行く**のです。／（『此の六根の業、枝（し）・篠（じょう）・華（け）葉（よう）～一切の生處（しょうしょ）に滿（み）てり』）**身と心の罪**から生じる毒気は、六根の枝葉末節に至るすべてに広がり、三界の一切の生き物に悪影響を及ぼし、何度生まれ変わってもその**毒気は付いて回ります**。そして／（『無明・老・死・十二の苦事（くじ）を増長す』）十二因縁で説かれている無明に始まって老・死に終わる十二の苦しみが増長して行くのでした。その結果、八つの邪見**『八邪(はちじゃ)』**と、仏を見ることもできず法を聞くことすらできない八つの苦難**『八難(はちなん)』**に陥（おちい）るのです。／（『惡不善（あくふぜん）の業を懺悔すべし』）それゆえそなたは、**身と心の悪業**の懺悔をしなければなりません』という声が聞こえてくるのです」

【四一四頁 五行】「すると修行者は、具体的にどのように**懺悔**をして行けば良いかを、次のように問いかけるでありましょう」

【四一四頁 終五行】「『(『釋迦牟尼佛を毘盧遮那遍一切處（びるしゃなへん いっさいしょ）と名（なづ）けたてまつる』)**釈迦牟尼仏**は久遠実成の法身仏で、常にあらゆる所におられます。仏さまのおられる所は／(『常波羅蜜（じょうはらみつ）に攝成（しょうじょう）せられたる處（ところ）』) 常に光り輝く**常寂光土**の世界です。仏の世界は常に変わらぬ完成された世界であり、／(『我波羅蜜（がはらみつ）に安立（あんりゅう）せられたる處（ところ）』) 小我から離れて大我による安穏な世界であり、／(『淨波羅蜜（じょうはらみつ）の有相（うそう）を滅せる處（ところ）』) 現象を超越した真の平等の世界であり、／(『樂波羅蜜（らくはらみつ）の身心（しんじん）の相に住せざる處（ところ）』) 平和で、我が身にとらわれず苦も悩みもない世界です。／(『如寂解脱（にょじゃく げだつ）・乃至（ないし）般若波羅蜜（はんにゃはらみつ）なり』) 一切の苦から解脱した完全なる智慧の世界なのです。／(『是（こ）の色常住（しき じょうじゅう）の法なるが故に』) 仏の世界とは、現象(色)が変化することのない**常住の絶対の世界**ですから、十方世界もこのように観じて、懺悔をしなければなりません。』と」　　**――【身根(しんこん)・意根(いこん)の罪の懺悔】**

【『十方分身仏の教え』 ― 懺悔の法（最高の懺悔とは）】――

【四一五頁 一行】「その時、**十方の仏**は右手を差しのべて修行者の頭を撫（な）で、次のようにお教えになるでしょう。『善哉。善哉。善男子よ。菩薩の行を行うには、／(『結使（けっし）を斷（だん）ぜず使海（しかい）に住せず』) **煩悩(結使・けっし)**を断ち切らなくとも**煩悩の海(使海・しかい)に溺れない**ということが大切なのです。／(『顚倒（てんどう）の想（おもい）より起（おこ）る』) 凡夫の心は転倒したものの見方から起こるもので、真実を真実ではないと反対に見てしまう**顚倒(てんどう)の考え**から生じるものです。／(『空中の風の依止（えし）する處（ところ）なきが如し』) その心の動きは、吹く風が止まったままのようで、一定ではないのと同じです』」

【四一五頁 五行】「『(『是（かく）の如き法相（ほっそう）は生ぜず没（もっ）せず。何者か是（こ）れ罪（つみ）、何者か是（こ）れ福、我が心自（こころ おのずか）ら空なれば罪（ざい）・福も主（しゅ）なし』) 全ての**真実のすがた**とは、生じたり滅したりするものではなく**《空》**であります。ですから一体何を**罪**とし、何を**福**とするか。自分の心が**《空》**であれば、もともと**罪**も**福**もその実体はないのです。／(『一切の法は是（かく）の如く住（じゅう）なく壞（え）なし』) **一切の出来事**は、固定した実体があるのではなく、その場に留（とど）まったり、または壊れ、滅するというものでもありません。／(『心を觀（かん）ずるに心なし』) これが心だと思っていたものは本当の心ではなく、転倒した妄想（もうそう）に過ぎないものです。／(『法も法の中に住せず』) **世の中の出来事**は、五官でとらえるような在り方で実在しているものではないということが、しっかりと解ってくるはずです』」

【四一五頁 七行】「『(『諸法は解脱なり、滅諦なり、寂靜（じゃくじょう）なり、是（かく）の如き相をば大懺悔と名（なづ）く』) ですから、すべての出来事はすでに解脱した状態で、苦しみもなく、安穏で円満で生々滾渫（せいせいはつらつ）している寂静（じゃくじょう）の状態なのです。このことを悟ることが**《諸法実相》**を悟ることで、**最高の懺悔である《大荘厳懺悔・だいしょうごんさんげ》**と言います。また、このように**《諸法実相》**を悟るという懺悔は、もっとも美しい懺悔で、本当に罪を無くしてしまう**(宿業も現業もすべてなくしてしまう)**懺悔でありますから、これを名付けて**《無罪相懺悔・むざいそうさん**

げ》とも言います。また、／（『破壊（はえ）心識（しんしき）と名（なづ）く』）現状を固定して見る見方を打ち破り、真実の悟りに心を向けさせるもので**《破壊心識・はえしんしき》**と言います』」

【四一五頁 終四行】「『（『此の懺悔を行ずる者は、身心清浄（しんじん しょうじょう）にして』）こういう**《諸法実相》**を思念する懺悔を続けて行けば、身も心も清らかになり、／（『法の中に住せざること、猶（な）を流水（るすい）の如し』）**移り変わる現象にとらわれず、水がサラサラと流れて行くように精神が自由自在になります**。常に普賢菩薩と十方の諸仏と共にあるということを、目で見るように実感として感じ取ることができるようになります』と**十方世界の諸仏**は述べられたのでした」

【四一五頁 終行】「その時、**十方の諸仏**はその修行者に大慈悲の大光明を降り注ぎ、すべての物事には特定の相（すがた）はないという**『無相の法』**、つまり**《空》**の教えをお説きになります。修行者はその教えを聞いても、もはや驚くようなことはなく、時を経ることによって真の菩薩の境地を得ることができるのでありましょう」

【『諸法実相』 を観ずることが ― 最高の懺悔（大乗経典を読誦せよ！）】――

【四一六頁 二行】その時、**釈迦牟尼仏**は**阿難**に仰せになりました。

「（『是（か）くの如く行ずるをば名（なづ）けて懺悔とす』）この行い（**『諸法実相』**を観ずること）を**懺悔**というのです。これは十方の諸仏・諸菩薩も行っている**最高の懺悔の法**です」

【四一六頁 三行】さらに**釈迦牟尼仏**は**阿難**に仰せられました。

【四一六頁 四行】「私の入滅後、／（『若し悪不善業（あくふぜんごう）を懺悔することあらば、但（ただ）当（まさ）に大乗經典を讀誦すべし』）仏の教えを信仰する者が**自身の悪行を懺悔しようとする**ならば、まずは**大乗経典を読誦する**ことです。この経は**諸仏の眼（まなこ）**です。諸仏はこの教えによって**五眼（ごげん・ 肉眼にくげん/天眼てんげん/慧眼えげん/法眼ほうげん/仏眼ぶつげん）**を具えることができました。**仏の三身**である**法身仏**（ほっしんぶつ/ 真理と一体・久遠仏）**・報身仏**（ほうしんぶつ / 真如から来た仏の姿・如来）**・応身仏**（おうじんぶつ / 人の姿となった仏）は、この大乗経典（方等経典）によって生ずるものです。／（『是（こ）れ大法印（だいほういん）なり、涅槃海（ねはんかい）を印（いん）す』）これこそ仏教の旗印（はたじるし）であり、海のように広々としたらかな世界を説くものです。真の涅槃を説いた大乗の教えだからこそ、清らかな**仏の三身**を生ずることができるのです。／（『此の三種の身は人（にん）・天（でん）の福田・應供（おうぐ）の中の最なり』）この**三身仏（法身仏・報身仏・応身仏）**は人間界・天上界のあらゆる生き物に**『福』**を与えるもので、全ての者が最高の讃歎と感謝を捧げるべき至上の存在です。／（『大乗方等經典を誦讀（じゅどく）することあらば～ 此の人は佛の功徳を具し、諸惡永く滅して佛慧（ぶって）より生ずるなり』）ですから**大乗の教え（大乗方等経典）を読誦する者**は、**仏の智慧**を生じ、**仏の徳分を具え、永久に悪から離れることができる**ということを知らなければなりません。」

【（偈）：六根の懺悔の法】――

【四一六頁 終三行】その時、世尊はこれまで説かれたことを偈によって教えられました。

【(偈)四一六頁 終二行】/【経典三十二頁 四行】「『(『若し眼根(げんこん)の悪あって、業障(ごうしょう)の眼不浄(まなこふじょう)ならば～ 第一義を思念すべし』) もし、悪業の障りによって**ものの見方**が誤る**眼根**(げんこん)の罪に気づいたならば、一心に大乗の教えを読誦し、**《空》**の教えをしっかりと思念することです。これこそが**眼**(まなこ)**の懺悔**であり、／(『諸(もろもろ)の不善業を盡(つ)くすと名(なづ)く』) これによって一切の**不善業**(悪の行為)を消滅し尽くすものであります』 ―― **【眼根**(げんこん)**の懺悔】**

【(偈)四一六頁 終行】/【経典三十二頁 終行】「『**耳**は意に沿わぬ言葉を聞いて心を乱すばかりでなく、正しい言葉であっても、／(『耳根(にこん)は乱聲(らんしょう)を聞いて和合の義を壊乱(えらん)す』) 嫌な言葉や乱れた**聞き方**をすることで、自分の精神状態のみならず、人間関係の不和を生みます。誤った**聞き方**をすることによって転倒した考えを起こし、／(『狂心(おうしん)を起すこと 猶(な)お癡(おろか)なる猿猴(おんこう)の如し』) それは本能のみで動く猿のように落ち着きがなく飛び回るようで、自分勝手です。／(『當(まさ)に大乗を誦(じゅ)し、法の空無相(くうむそう)を觀ずべし』) ですから大乗の教えを読誦し、物事の実相あるで**《空》**、**《諸法実相》**を思念しなければなりません。そうすることで永久に悪を寄せ付けず、／(『天耳(てんに)をもって十方を聞かん』) すべてのものごとを正しく聞き取ることができるようになっていくのです』」 ―― **【耳根**(にこん)**の懺悔】**

【(偈)四一七頁 三行】/【経典三十三頁 四行】「『(『鼻根(びこん)は諸香(しょこう)に著(じゃく)して 染(ぜん)に隨(したが)って諸(もろもろ)の触(そく)を起す』) **鼻根**のみならず**五官の全て**は、感覚の快感だけを求めてそれに執着すれば、それに染まり、引きずられ、その結果、悪い行為をしてしまいます。／(『染(ぜん)に隨(したが)って諸塵(しょじん)を生ず』) そのために様々な煩悩の塵(ちり)と垢にまみれることになります。その時、／(『大乗經を誦し 法の如實際(にょじっさい)を觀ぜば 永く諸(もろもろ)の悪業を離れて 後世に復(また) 生ぜじ』) 大乗経を読誦し、**《空》**、**《諸法実相》**を観ずるならば、永遠に諸々の悪業から離れることができ、再び生まれ変わっても悪行を行うようなことはありません』」

―― **【五根**(ごこん)**の懺悔**(鼻根をはじめとして)**】**

【(偈)四一七頁 六行】/【経典三十三頁 終行】「『(『舌根(ぜっこん)は五種の 悪口(あっく)の不善業(ふぜんごう)を起す』) **舌根**は五種の**悪口**(**あっく**/ **悪語**あくご・わるくち/**害語**がいご・人を害する言葉/**苦語**くご・苦を生む言葉/**麤語**そご・荒々しい言葉/**弊語**へいご・たちの悪い言葉)を作る元です。それを改めようと思うならば、慈悲の行いをつとめ、仏の教えの真義である**《空》**、**《諸法実相》**を観ずることです。／(『法の眞寂(しんじゃく)の義を思うて 諸(もろもろ)の分別の想(おもい) なかるべし』) あらゆる人が等しく仏性を有していることを確信し、分け隔(へだ)てをする考えを捨て去ることです』」 ―― **【舌根**(ぜっこん)**の懺悔】**

【(偈)四一七頁 終五行】/【経典三十四頁 三行】「『(『心根は猿猴(おんこう)の如くにして、暫(しばら)くも停(とど)まる時あることなし』) **心根**は枝から枝へと飛び移る猿のように、しばらくもじっとしているものではありません。／(『若し折伏(しゃくぶく)せんと欲せば』) もし悪を破折(はしゃく)して正しい道へと引き入れようと願うならば、大乗の教えを読誦して、／(『佛の大覺身(だいかくしん)力(りき)・無畏の所成(しょじょう)を念じたてまつるべし』) 最高無上の悟りと一切衆生を救い切る力、しかも、何も

のにも畏（おそ）れはばかることのない勇気を持つ仏の尊い姿を思い浮かべることが大切です』」

――【意根(いこん)の懺悔】

【(偈)四一七頁 終三行】/【経典三十四頁 終二行】「『(『身は爲（こ）れ機関の主 塵（ちり）の風に隨（したが）って轉（てん）ずるが如し 六賊（ろくぞく）中に遊戯（ゆけ）して自在にして罣礙（さわり）なし』) **身体**は様々なはたらきをするものですが、それは周囲の影響によって如何ようにも変化します。それはまるで塵（ちり）が風のなかで吹き飛ばされて舞うように、人間の欲望は六根の中で勝手に動き回るのです。／(『安樂にして心憺怕（こころ たんぱく）ならんと欲せば～ 諸（もろもろ）の菩薩の母を念ずべし』) もしこの悪の欲望を滅し、永久に煩悩が動き出さず、常に涅槃の境地にいて心安らかで、報いを求めない淡々とした心境でいたいと願うならば、大乗の教えを読誦して、菩薩の母胎といえる徳分、すなわち仏の**《慈悲》**を具えることを念じることです』」

――【身根(しんこん)の懺悔】

【『諸法実相』 を観ずることが ― 最高の懺悔】――

【(偈)四一八頁 一行】/【経典三十五頁 三行】「『(『無量の勝方便（しょうほうべん） は 実相を思うに従（よ）って得（う）』) 人間を高める無数の優れた方便というものは、このように**《諸法実相》**を観ずるところから生まれるものです。いま説いた**六つの教え(先の【眼根～身根の懺悔の法】・つまり六根を懺悔する法)**が、その例であって、つまり人間自身を正しく変えて行くことが、**《諸法実相》**を見極める方法なのであります』」

≪法華三部経の総しめくくり≫ ――

【(偈)四一八頁 二行】/【経典三十五頁 終三行】「『以上のことをまとめて言うならば、／(『一切の業障海（ごう しょうかい） は 皆妄想（みな もうぞう） より生ず』) 一切の誤った行為というものは、存在しないものを存在すると捉えてしまう**妄想(もうそう)から起こる**ものです。ですから、／(『若し懺悔せんと欲せば 端坐（たんざ） して実相を思え』) もし、自分の業障を懺悔しようと思うならば、静かに端座して**《諸法実相》**を深く思念することが第一です。それはちょうど霜（しも）や朝露（あさつゆ）が太陽の日差しを受けるとたちまちに消滅するように、／(『衆罪（しゅざい） は霜露（そうろ） の如し 慧日（えにち） 能（よ）く消除（しょうじょ）す』) 諸々の罪というものは、実相の光に会えば、すぐさま消えて行くものです。ですからひたすらに懺悔をすること。／(『是（こ） の故に至心（ししん） に 六情根（ろくじょうこん） を懺悔すべし』) つまり深く**《諸法実相》**を思念することで、六根を洗い清めていくのです』」

【諸仏・諸菩薩が『懺悔の法』を実践する者を供養する】――

【四一八頁 五行】 この偈を説き終えた**釈迦牟尼仏**は、**阿難**に向かって仰せになりました。

「そなたは六根を懺悔し、普賢菩薩を観ずる法をしっかりと身に付けなさい。しかも十方世界の天上界・人間界の人々に対して、相手に応じて法を説き分けて行きなさい。私の入滅後、多くの仏弟子が大乗の教えを受持・読誦し、人々に教えを説くならば、墓場や樹木の下、人気（ひとけ）のない静かな所で大乗の教えを読誦し、教えを深く思念しなければなりません。その思念が強ければ強いほど、私の身および多宝仏塔と十方分身（ふんじん）の無量の諸仏、普賢菩薩、文殊菩薩、薬王菩薩、薬上菩薩の姿を見るでしょう。そして諸仏と諸菩薩は、妙法を恭敬（くぎょう・

うやうしく敬う）するため、空中から花々を散じ、妙法を実践する者を讃歎するでしょう。このように大乗の教えをただ読誦するだけでも、／（『諸佛・菩薩昼夜に是（こ）の持法（じほう）の者を供養したまわん』）**諸仏･諸菩薩は昼夜を分かたずその人を供養する**のです」

【最高の懺悔とは、『諸法実相』 を観ずること。 三度(みたび)強調】 ――

【四一九頁 七行】 **釈迦牟尼仏**はさらに**阿難**に向って告げられました。

「宇宙が生成されて宇宙の安定期にあたる**《賢劫･げんこう》**という時代に現われた十方世界の諸仏と諸菩薩は、大乗の教えが示す**真実(《諸法実相》)を深く思念する**ことで、／（『百萬億阿僧祇劫（あそうぎこう）の生死（しょうじ）の罪を除却（じょきゃく）しき』）百万億阿僧祇劫（あそうぎこう）という無限の過去世から生まれ変わり、死に変わりして積んできた一切の罪を消滅することができたのでした。／（『此の勝妙（しょうみょう）の懺悔の法に因（よ）るが故に、今十方に於て各(おのおの)佛となることを得たり』）この最も優れた懺悔の法によって、現世の十方世界の諸仏が、仏と成ることができたのです。ですから回り道をせずに真っ直ぐに仏の悟りに到達したいと願うならば、また現身のそのままの身で十方の諸仏と普賢菩薩と共にいるのだという自覚を得たいのであれば、身を洗い清め、衣服を清潔にし、香を焚（た）いて、／（『應當（まさ）に大乗經典を誦讀（じゅどく）し大乗の義を思うべし』）静かな所で**大乗の教えを読誦し、その意義(『諸法実相』)を深く思念**しなければなりません」

【四一九頁 七行】 さらに**釈迦牟尼仏**は**阿難**に向って仰せになりました。

【四一九頁 八行】「もし人々が普賢菩薩と共にいることを自覚したいと願うならば、／（『當（まさ）に是（こ）の觀（かん）を作（な）すべし。是の觀を作す者是（もの こ）れを正觀（しょうかん）と名（なづ）く。若し他觀（たかん）する者、是れを邪觀（じゃかん）と名（なづ）く』）これまで私が説いてきた世界観・人生観を持つことです。つまり**一切の出来事**は五官でとらえるような在り方で実在しているのではない。**真実のすがた**というものは、固定した実体があるのではなく、その場に留（とど）まり、壊れ、滅するというものでもないただ一つの絶対平等**《空》**であるという**《諸法実相》**に基づく世界観・人生観を観ずることです。そのような見方で物事を捉えることを**《正観しょうかん･正しいものの見方》**といい、それ以外のものの見方で捉えることを**《邪観じゃかん･誤ったものの見方》**というのです」

【『諸法実相』 を観ずる最高の懺悔よって、『宿業』を滅する】 ――

【四一九頁 終三行】「私の滅後、私の弟子たちが私の言葉に従って**懺悔の行**を行ずるならば、その人はまさに**普賢菩薩と同じ行**をしていることと同じです。この行をなす者は／（『惡相（あくそう）及び惡業報（あく ごうほう）を見（み）じ』）起こる**現象を悪く見ないために悪業の報いを受けることがなくなる**でしょう。／（『其（そ）れ衆生あって、晝夜（ちゅうや）六時に十方の佛を禮（らい）したてまつり、大乗經を誦（じゅ）し、第一義甚深（じんじん）の空法（くうぼう）を思わば、一彈指（いち たんじ）の頃（あいだ）に百萬億阿僧祇劫の生死（しょうじ）の罪を除却（じょきゃく）せん』）ですからたとえ**普通の人々でも**昼夜六回、十方の諸仏を礼拝し、大乗経を読誦して深遠な**《空》**の教え**《諸法実相》**に思いを凝（こ）らすならば、指を鳴らすくらいの一瞬の間（**『一彈指･いちたんじ』**）に、百万億阿僧祇劫（あそうぎこう）という永い間に**生まれ変わり死に変わりして積んできた悪業を、すっかり消し去ってしまうことができる**のです」

【四二0頁 二行】「『(『此の行を行ずる者は眞(しん)に是(こ)れ佛子なり』) この**懺悔の行**を行ずる人こそ、**《真の仏の子》**であります。その人は諸仏から生まれた人であり、／(『十方の諸佛及び諸(もろもろ)の菩薩、其(そ)の和上(わじょう)となりたまわん』) 十方の諸仏、および菩薩がその人を**導く師**(『和上』)となります。そういう人こそ菩薩としての戒め**《菩薩戒** ／ **止悪**しあく・悪をやめる ／ **修善**しゅぜん・善に向かうよう修行する ／ **利他**りた・他の人のためになる行いをなす**》**を完全に実施できる人であると言えます。しかも菩薩になるための正式な儀式・作法というものは不要で、自然に菩薩としての資格を有することになり、一切の人間・天上界の人々から供養を受ける尊い身となりましょう」

【四二0頁 六行】「もし修行者が**《菩薩戒》**を完全に具えたいと願うのであれば、十方世界の諸仏を合掌して礼拝し、これまでのさまざまな罪を懺悔して、自分の過ちを告白しなければなりません。諸仏に懺悔をする時、具体的に次の言葉を申し上げることが必要です」

【『菩薩になろう』と願うならば、唱えるべき『懺悔の言葉』と実践法】 ――

【四二0頁 八行】「『あらゆる仏さまは、常に私と共におられます。しかし自分が作った過去の業障のために、大乗の教えを信じていながらも仏さまを目にすることができないでいます。今、あらためて仏さまに帰依申し上げます。／(『唯(ただ)願わくは釋迦牟尼佛正遍知(しょうへんち)世尊、我が和上(わじょう)と爲(な)りたまえ』) 最高の智慧を具える**釈迦牟尼仏**よ。願わくは私を直接お導き下さる師となってください。慈悲深き**文殊菩薩**よ。願わくは私に智慧を与え、清らかな菩薩の法をお授けください。太陽の如き慈悲の心を持つ**弥勒菩薩**よ。私が菩薩の法を受けられるようお導きください。**十方の諸仏**よ。どうかお姿を現わして頂き、私が菩薩になって行くさまをお見届けになってください。大いなる志をお持ちになっている**諸菩薩**よ。衆生を守護して頂き、私どもの修行精進にお力をお授けください。今こそ私は、大乗の教えを受持致します。／(『乃至(ないし)失命(しつみょう)し、設(たと)い地獄に堕(お)ちて無量の苦を受くとも、終(つい)に諸佛の正法を毀謗(きほう)せじ』) たとえそのために命を落とし、また地獄に堕ちて無量の苦しみを受けることがあっても、私は諸仏が説かれた正法を絶対に謗(そし)るようなことは致しません。私のこの強い信心とその功徳によって、／(『今釋迦牟尼佛、我が和上(わじょう)と爲(な)りたまえ』) どうか**釈迦牟尼仏**よ。／(『我が阿闍梨(あじゃり)と爲(な)りたまえ』) 私を直接導く**直々の師**になってください。**文殊菩薩**よ。釈尊と共に私をお導きください。未来世において仏となる**弥勒菩薩**よ。／(『我に法を授けたまえ』) 願わくは私に教えを授けてください。**十方の諸仏**よ。／(『我を證知(しょうち)したまえ』) 願わくは私の精進の過程をしっかりとお見届けください。そして大徳の**諸菩薩**よ。／(『我が伴(ばん)と爲(な)りたまえ』) 願わくは私と共に精進の道を歩んでください。私は今こそ、この大乗経典の深遠なる教えによって／(『佛に歸依(きえ)し、法に歸依(きえ)し、僧に歸依(きえ)すと』) **仏・法・僧の三宝を帰依**します』と、以上のことを三度唱えるのです」

【四二一頁 終四行】「三宝帰依を深めたならば、次に自分の行いについて六つの戒め**《六重(ろくじゅう)の法》**(❶不殺生戒 ❷不偸盗戒 ❸不邪淫戒 ❹不妄語戒 ❺不飲酒戒 ❻不説過戒 /人の過ちを言いふらさない) の実践を誓うのです。この**《六重の法》**の実践によって清らかな行いを、何ら障りなく実践することができ、／(『曠濟(こうさい)の心を發(おこ)し』) 普く人々を救おうという志を立てることができるようになります。

そして先の**《六重の法》**に、《自分の過ちを隠さない》。《他人の悪い所だけを取り上げて非難しない》という二つの戒めを加えた**《八重(はちじゅう)の法》**の実践を誓うのです」

【四二頁 終二行】「この誓いを立てたら、静かな所で香を焚(た)き、花を散じて一切の諸仏・諸菩薩、そして大乗の教えを供養して、次のように唱えなさい。／（『菩提心を發(おこ)しつ。此の功德を以て普く一切を度せん』）『私は今、悟りを得ようと願う菩提心を発(おこ)し**【上求菩提】**、その功徳によって、どうか一切の人々を救うことができますように**【下化衆生】**』と心から誓うのです」

【四二頁 二行】「この言葉を唱えたならば、さらに一切の諸仏・諸菩薩を伏して礼拝し、大乗の教えを深く思念しなさい。そのようなことを一日から三七日(三週間)に及んで行なったとしましょう。そして出家・在家を問わず、導師による菩薩戒の受戒の儀式を行わなくても、また告白文を読んで過去の行為を告白しなくても、十方諸仏の教えの眼目である大乗の教えを受持・読誦した功徳によって、普賢菩薩の助けを頂き**《五分法身(ごぶん ほっしん)》**（**戒**(持戒)・**定**(禅定)・**慧**(智慧)・**解脱**(煩悩からの解脱)・**解脱知見**(解脱した経緯を知る)）という高い境地を得ることができます。／（『諸佛如來は此の法より生じ、大乗經に於て記莂(きべつ)を受くることを得たまえり』）諸仏は大乗の教えから生まれたと言え、諸仏が説くあらゆる教えの要点は、この大乗の教えに込められています。ですから大乗の教えによって、私たちは**仏に成る保証・受記**を得ることができるのです」

【出家修行者の戒め】――

【四二頁 終五行】「もし修行者が、声聞が三宝帰依、五戒・八戒・比丘戒・比丘尼戒・沙弥(しゃみ)戒・沙弥尼(しゃみに)戒・正学女(しょうがくにょ/上級の沙弥尼)戒というものを破り。修行の威厳を傷つけ、本能むき出しの心や、不善の心・邪(よこしま)な心によって、戒めや修行者としての立ち振る舞いの戒めを破ったとしましょう。しかし、そのような過ちを消し去り、再び立派な修行者に立ち戻って沙門の教えを完全に成就しようと願うならば、大乗経典をしっかりと読誦し、**《空》**を観じ、**《空》**による智慧、すなわち**《平等大慧》**（**一乗の法が真実であると説く智慧の中でも最高の智慧**/仏と衆生は一体。一切衆生は平等であるとする智慧）がはたらくようにならなければなりません。そうなれば一瞬として罪や煩悩による過(あやま)ちは生ぜず、永久に無くなります。そうなってこそ沙門の教えと戒めを成就して、さまざまな修行の作法も身に付いたと言えるのです。こういう人こそ、人間界・天上界のあらゆる人々が供養するにふさわしい人です』　　**――【出家修行者の戒め】**

【在家修行者の戒め】――

【四二三頁 三行】「もし在家修行者が、精進の威厳を傷つけ不善の行いをしたとしましょう。この不善の行いとは、仏法の粗探し(あらさがし)をしてそれを得々と論じ、男女の出家・在家の修行者たちの過(あやま)ちを言いふらし、盗みや不品行の行いをしても少しも恥じないことです。それらの行いを懺悔して、諸々の罪を滅しようと願うならば、大乗経典を一心に読誦し、**《空》、《諸法実相》**を深く思念することです」

【四二三頁 六行】「もし王様・大臣・上流階級の人・知識人・富豪・役人等、社会的地位の高い者が、

貪りを強くしたために**五逆罪**（**ごぎゃくざい・五無間ごむけん** / 父を殺す罪・母を殺す罪・聖者阿羅漢を殺す罪・仏の身を傷つける罪・仏弟子の和合を壊す罪）を犯し、また大乗の教えを謗（そし）り、**十悪業**（**じゅうあくごう** / 殺生せっしょう・偸盗ちゅうとう・邪淫じゃいん・妄語もうご・綺語きご・両舌りょうぜつ・悪口あっく・貪欲とんよく・瞋恚しんに・愚痴ぐち）を犯したとしましょう。その人はその悪業によって暴風雨にも勝る勢いで悪の道を突っ走り、必ず阿鼻地獄（あびじごく）に堕ちてしまうでしょう。／（『若し此の業障（ごうしょう）を滅除せんと欲せば、慚愧（ざんぎ）を生じて諸罪を改悔（かいげ）すべし』）そのような悪業を消滅したいと願うなら、それらの罪を深く恥じて反省し、罪を悔（く）い改めなければなりません」 ――**【在家修行者の戒め】**

【在家仏教徒の五大懺悔の法】――

【四二三頁 終三行】「ここで**釈迦牟尼仏**が、あらためて仰せになりました」

「在家の人はどのように懺悔をすれば良いのかと言えば、❶（『但當（ただ まさ）に正心（しょうしん）にして三寶を謗（ほう）せず、～ 梵行人（ぼんぎょうにん）の爲に惡留難（あくるなん）を作（な）さざるべし』）いつも正しい心をもって、**仏・法・僧の三宝**を謗（そし）らず、出家者の修行の障（さわ）りになるようなことをせず、真面目に修行をしている人の精進を妨（さまた）げないことです。いつも**六法**（仏・法・僧・戒・施・天）を強く念じ、それらの道を修行することです。つまり、大乗の教えを行ずる人を供養し、感謝の心で礼拝することです。そして自らも深遠なる教えである**《空》、《諸法実相》**を深く思念することです。／（『是（こ）れを刹利（せつり）・居士（こじ）の第一の懺悔を修すと名（なづ）く』）これが在家修行者の成す**第一の懺悔**の道であります」

【四二四頁 三行】❷「次に、／（『父母（ぶも）に孝養し、師長（しちょう）を恭敬（くぎょう）する、是（こ）れを第二の懺悔の法を修すと名（なづ）く』）**父母に孝行**を尽くし、**先生や年長者を敬う**こと、これが在家修行者の成す**第二の懺悔**の法です」

【四二四頁 四行】❸「（『正法をもって國（くに）を治め人民（にんみん）を邪枉（じゃおう）せざる、是（こ）れを第三の懺悔を修すと名（なづ）く』）**正法に基づいて国を治め、正しい政治の在り方を考え**、間違った考え方で人民を邪道に行かせないこと。また国や公共に正しくかかわり、**人々を誤った国づくり、社会づくりへと先導しないこと**。これが在家修行者の成す**第三の懺悔**の法です」

【四二四頁 五行】❹「（『六齋日（ろくさいにち）に於て～ 力の及ぶ所の處（ところ）に不殺（ふせつ）を行ぜしめ～ 是（こ）れを第四の懺悔を修すと名（なづ）く』）次に、月に六度の精進の日（『六齋日』古代インドの風習：毎月８日・14日・15日・23日・29日・30日）には、自分が治めている土地、社会に告知して**殺生が行われないよう努力する**こと。そして**あらゆる生命を尊重する思想を人々に広める**こと。これが在家修行者の成す**第四の懺悔**の法です」

【最高の懺悔を四度（よたび）強調 『第五の懺悔』】――

【四二四頁 七行】「最後に、❺（『但當（ただ まさ）に深く因果を信じ、一實（いちじつ）の道（どう）を信じ、佛は滅したまわずと知るべし。是（こ）れを第五の懺悔を修すと名（なづ）く』）**因果の道理**を深く信じ、仏に至る**一乗の道を信じ、久遠の仏はいつも自分と共にいて**、決して**仏は滅することはないと信じ、自覚する**こと。これが在家修行者の成す**第五の懺悔**の法です。**最高の懺悔**とは、このように仏法の神髄を悟ることにほかならないのです」 ――**【在家仏教徒の五大懺悔の法】**

【『仏説観普賢菩薩行法経』のしめくくり】――

【四二四頁 終四行】「**釈迦牟尼仏**は**阿難**に向かって、**《最後の締めくくりの言葉》**を述べられました」

「未来の世に於いて、もしこの**懺悔の法を実践する者**がいたならば、まさに知らなければなりません。／（『此の人は慚愧（ざんぎ）の服を著（き）』）その人は**《自らを素直に反省するという徳の衣》**を身につけ、／（『諸佛に護助（ごじょ）せられ』）**《諸仏に護られ、助け》**られ、／（『久しからずして當（まさ）に阿耨多羅三藐三菩提を成（じょう）ずべし』）長い年月をかけずして、必ず**《仏の悟り》**を成就することができるのです」

【四二四頁 終二行】「**釈迦牟尼仏**がこう説き終えられると、十千という多くの天上界の人たちは、**《空》**、**《諸法実相》**を直観的に見通す力である**『法眼（ほうげん）』**を得ることができ、**弥勒菩薩**をはじめとする諸大菩薩、および**阿難**を筆頭に声聞・縁覚の修行者たちも、釈迦牟尼仏の尊い教えを聴聞することができたことを／（『歡喜（かんぎ）し奉行しき』）**心から歓喜し、必ず教えを実践する**ことを固く決心したのでありました」

◇　　◇　　◇

懺悔（さんげ）　　（P15・1行／P11・終3行）

迷いを打ち払い、心の誤りを正すためには、どうしてもその迷いや誤りを反省することが必要です。（大切なことは）

第一に「誤り」をハッキリと**自覚**し、

第二に「誤り」を改めることを**心に誓い**、

第三に「正しい道」へ向かう**努力**をする

～ この三つの段階を通り、こういう三つの条件を満足してこそ、**限りない『向上の道』**を登ることができるのです。～ 非常に雄々しい、勇気に満ちた、積極的な行いなのであります。

宗教的な懺悔（しゅうきょうてき　さんげ）　　（P16・終4行／P13・1行）

宗教のような、**『心の浄化』**を何より重視する世界においては、ますますこの**『懺悔』**が大切になってきます。いや、**『懺悔』**なしには、宗教というものは成り立たぬものであります。

秘（ひ）し隠（かく）しておきたいことを、強（し）いてさらけ出すことによって**小我（しょうが）を否定し、**心を**無私の状態にし、空っぽにして**しまわない限り、**仏性は輝き出してこない**からであります。

《思惟（しゆい）のひととき　①》

「❶『誤り』を**ハッキリと自覚**し、⇒ ❷『誤り』を**改めることを誓い**⇒ ❸『正しい道』へ**向かう努力をする**。この三つの段階・条件を満足してこそ、**限りない『向上の道』**を登ることができる」と庭野開祖は説きます。――　この❶❷❸という**『三条件』**について深めてみましょう。

自分をさらけだして見せる

(P19・6 行／P14・終 3 行)

『懺悔』とは梵語で“デーシャナー”もしくは“クシャマ”と言いますが、“デーシャナー”というのは、**『見せること』**という意味です。すなわち、自分のすべてをさらけ出して見せることなのです。これがなくては**『懺悔』**は成り立ちません。(クシャマとは、自分の罪を悔い、許しを請・こうこと)

～ **『懺悔』とは、まず自分を〈見せること〉**、これはぜひ胸に銘記しておかねばならぬ**一大眼目**であると思います。

人にたいする懺悔の効用

(P21・7 行／P16・3 行)

世俗の世界においては、我々はなかなか素っ裸になりきれるものではありません。なぜならば、～ 自衛本能から、多少なりと殻をかぶって、人々に対するようになります。それは～ やむを得ないことではありますが、～ 一生の間、殻をかぶりっぱなしで過ごすとしたら、どうして本当の**『人間らしい幸福』**が味わえましょうか。どうして**『本当の人格』**が育ちましょうか。

なぜ、本当の**『人間らしい幸福』**を味わえないかと言いますと、殻をかぶっておれば、心がそれに閉じ込められ、**自由自在にならない**からです。～ なぜ**『本当の人格』**が育たないかと言いますと、心に殻をかぶせることが習慣になれば、常に何がしかの**欺瞞(ぎまん)**をなしていることになるからです。そして心は四六時中**〈我執・がしゅう〉で充満**し、仏性が輝きを出してこないからです。

懺悔を聞く人の心得

(P25・5 行／P18・終 4 行)

我々は自ら懺悔するばかりでなく、人の懺悔を聞く立場になることもしばしばあるものです。その場合の心得について、～ 紹介しておきたいと思います。

一、時に応じて語る。

懺悔を聞く人は、それぞれの人に応じ、場合に即して、適切な指導を与えるべきであるというのです。いわゆる『教条主義』を戒められたものと思われます。

二、真実をもって語る。

あくまでも正法にしたがって判断し、正しいことばで指導する。

三、柔軟(じゅうなん)に語る。

声を荒げて叱責(しっせき)したりせず、穏やかな調子で、心から納得できるように話さなければならない。

四、利益(りやく)のために語る。

相手がそれによって向上するように、正しい悟りを得るように・・・という目的のためにのみ話さなければならない。

五、慈心(じしん)をもって語る。

相手を幸せにしようという深い愛情をもって対(たい)さなければならない。

諸法実相の悟りに徹する

(P29・5 行／P21・5 行)

懺悔の極致は諸法実相を思念することだと説かれています。『端坐 (たんざ) して実相を思え』ともあります。つまり、諸法実相の悟りに徹することが、最高の『懺悔』だというのです。～『懺悔』というものは、《行》から入って、《定・じょう》を得、そうすることによって〈諸法実相の悟り〉に徹することだということができます。

それが完全に〈普賢菩薩を観ずる〉ことにほかならないのだ、ということになります。

※《行》とは、「誤りを❶ハッキリと自覚し、誤りを❷改めることを心に誓い、『正しい道』へ向かう❸努力をする」という『懺悔』の実践」。《定》とは、「心が澄み切った正しく落ち着いた状態」。

《思惟のひととき ②》

「『懺悔』の極致は、『諸法実相』を思念することだ (『端坐 (たんざ) して実相を思え』)」と庭野開祖は説きます。つまり『懺悔』とは、単に自身の「過ち」を詫びることで終わってしまうのではなく、『諸法実相』を思念することだと説かれているのです。

―― 『諸法実相』とは、つまるところ、この世は『縁起』『因縁果報』によって成り立っているというものでありますが、「『懺悔』の極致は、『諸法実相』を思念することだ」というこの庭野開祖の指導を、あなたはどのように受け止めますか？ かみ締めてみましょう。

菩薩の心

(P33・終 3 行／P25・3 行)

一言にしていえば、〈上求菩提・じょうぐぼだい／下化衆生・げけしゅじょう〉の心です。無上の仏の悟りを求めて修行すると同時に、一切衆生を教化せずにはやまぬという精神です。

白象・六牙・七支地・七蓮華・十四蓮華

(P50・6 行／P38・終 4 行)

【白象】⟹ 白は「清らかさ」。象は「実践力」。まず「行いを正す」ことの象徴。

【六牙・ろくげ】⟹ 「六波羅蜜」。

【七支地・しちじ】⟹ 「七戒律」。(不殺生・不偸盗・不邪淫・不妄語・不悪口・不綺語・不両舌)

【七蓮華】⟹ 「七戒律」を守ることによって、「その人および周囲が美しく変化」する。

【十四蓮華】⟹ 眼・耳・鼻・舌・身の「五根」と、五根によって知覚される色しき・声しょう・香こう・味み・触そくの「五境」。さらに現象を構成するとされる地・水・火・風の「四大・しだい」の全てが清められ、美しくなる。

『其の華金色にして含んで未だ敷けず。～ 華を見るに即ち敷け金色に金光あり』

(三九四頁 五行)

理想を追いつつも現実に結果を出す　(P62・終行／P49・4行)

『脚地を履まず、虚を躡んで遊ぶ。～ 地に印文あり』　(三九五頁　二行)

たくみな譬えです。空中を歩くというのは**『理想』**に向かって進むことで、それでも地面に足跡が付くというのは、**『理想』**を追いつつも、**『現実』**のうえに、歴然とした**『結果』**があらわれてくることを言ってあるのです。

目を閉ずれば則ち見、目を開けば則ち失う　P88・7行／P71・1行)

『目を閉ずれば則ち見、目を開けば則ち失う』　(三九九頁　五行)

―― 目を閉じて心静かに精神を集中すれば、確かに仏さまを見ることはできるが、目を開いて現実の世界に目を向けると、仏さまのお姿も、その説かれる教えも、どこかへ飛んで行ってしまい霞(かす)んでしまうという不確かなものにすぎない。まだまだ自分の修行は不十分である。

⟹ じつに鋭く我々凡夫の実態をえぐり出した言葉です。～ この至らなさをよくよくかみ締め、反省してみることが、凡夫にとってはどうしても必要なのです。～ 我々が信仰のみに集中している時は、**『すべての人が平等に仏性を持っている』**という境地に近づいておられるのですが、現実の生活に戻ると、たちまちそれが崩れてしまいます。我々の人格が完成していないためであって、さればこそ、ますます修行を積みかさねていかなければならないのです。

《思惟のひととき　③》

『目を閉ずれはば則ち見、目を開けば則ち失う』。鋭く我々凡夫の実体をえぐり出したものだと、庭野開祖は示し、だからこそ、「自らの至らなさをよくよくかみ締め、反省することが、凡夫にとっては必要だ」と庭野開祖は説きます。

この経文を、あなたはどのように感じますか？　かみ締めてみましょう。

『是の六根清浄を得已って～ 心を是の法に純らにして法と相應せん』

(四〇一頁　三行)

〈法と相応せん〉―― 意識して『善い心を持とう』とか、『善い行いをしよう』とか思わなくても、自然とそれができるというのです。いわゆる**自然法爾(じねんほうに)**の素晴らしい境界です。

(P105・2行／P84・終4行)

仏を見失う

(P114・終3行／P93・1行)

『我何の罪あってか但寶地・寶座及び寶樹を見て、諸佛を見たてまつらざると』

(四〇二頁　終二行)

―― 『私は何の過ちがあるために、こうして宝樹や宝座を目にすることはできても、なぜ、諸仏を拝見することができないのであろう』と。深く反省懺悔しなければなりません』⟹ ひとたびは**『仏と共にある』**という自覚を強く得ることはできても、まだ菩薩の境界に達していない人は、他のことにちょっと心を奪われると、その自覚がすぐ遠のいてしまうのです。このように**『仏を見失った』**なら、～ いうまでもなく、また**懺悔をするのです**。深く反省し、その罪を洗い出してしまうのです。

六根を清めることの必要性

(P133・3行／P108・終5行)

(光り輝く仏を見ることができて) これほどの境地に達したのですから、いよいよこの辺で懺悔の修行もおしまいにしていいかと言いますと、それはとんでもない話です。自分では悟ったつもりでも、仏の悟りに比べれば大きな隔(へだ)たりがあるのです～ ですから、心を清め、**仏性を磨き出す修行**は、どこまでも怠ってはならないのです。それゆえ、その菩薩たちが、修行者の**六根を清める**ために、いろいろなことを命ずるわけです。～ つまり、菩薩たちの行ないと自分の行ないを比べ合わせて、**足りないところを反省する**ことを言ってあるのです。

眼根の罪を懺悔する法

(P148・5行／P120・終2行)

目の前にあらわれる現象だけを見るという根本的な誤りを悟り、全ての物事の実相をみるように努めることが、その要点であるということができましょう。～ 自分に対して徹底的に厳しく～ 自分の至らぬことを責めて懺悔するのです。⟹ ついに**仏性**が、まるで目の前に湧き出したかのようにアリアリと見えてくるようになる… ～ それを悟れば、仏性というものは、普(あまね)くどんな人の身にもあらわれることを確認することができるようになります。

そして、今まで凡夫だ悪人だと思っていた無数の人たちのなかにも光り輝く**仏性**があることを、まざまざと見ることができるようになります。

《思惟のひととき　④》

眼根(げんこん)の懺悔で、庭野開祖は「❶目の前にあらわれる現象だけを見ている自分を厳しく見つめて懺悔し⟹ それを続けて行くと、ついに仏性が涌き出たかのようにアリアリと見えて来るようになる。⟹ ❷今まで凡夫だ悪人だ（この人は愚かな人だ、嫌な人だ）と思っていた無数の人が、光り輝く仏性があることを、まざまざと見ることができるようになる」と説いています。 ―― この教示をどのように受け止めますか。 かみしめてみましょう。

耳根の罪

(P159・終行／P130・終行)

人の言うことを聞いて、悪く気をまわすのは、**凡夫の身の悲しい癖**です。とりわけ、人づてに聞いた場合に、それがひどいのです。そして、一度悪く解釈すると、それが先入観となって、**憎(にく)しみや怨(うら)みの念が次から次へと募(つの)っていく**のです。

方等経は慈悲の主

(P164・終4行／P135・2行)

大乗の教えは、**慈悲心のおおもと**になるものであるという意味です。

大乗経典の核心となる教えは、**〈すべての人が平等に仏性をもっている〉**ということです。～ **〈一切のものは、すべて久遠の本仏に生かされ、仏性を持った自分と同等の存在である〉**ということです。～ このことを心の底から悟ることができたならば～ **自他一体感**に基づく深い愛情が湧いてこざるをえません。こういった愛情を**『慈悲』**というのです。

『方等經典は爲れ慈悲の主なり』　(四〇九頁　終二行)

舌根の罪

(P180・2行／P148・2行)

（舌根の罪の）そのもとになるのは、心の迷いであって、(『舌根は悪業の想(おもい)に動ぜられて』) すなわち、口はいろいろな罪を作るのですから、つまるところは心を直さなければならない訳です。

逆に口に出した言葉が良くない心を増長させることも多いもので～　心と言葉のどちらも、原因となり、結果となるのですから、口にはよほどの**戒心(かいしん)が必要**なのです。～ ですから、自分の口から出した**言葉については常に反省し、懺悔をしなければならない**というのです。

《思惟(しゆい)のひととき　⑤》

「舌根の元になるのは心の迷いであって、口はいろいろな罪を作るから～ 心を直さなければならない。逆に❶口に出した言葉(悪い言葉)が良くない心を増長させることも多いもので～ ❷口にはよほどの戒心(かいしん)が必要だ、❸自分の口から出した言葉については、常に反省し、懺悔をしなければならない」と、庭野開祖は説きます。

――「口は禍(わざわい)の元」という言葉もありますが、庭野開祖のこの教示を、あなたはどのように受け止めますか？　かみしめてみましょう。

身根・意根の罪の懺悔

(P196・1 行／P160・終 4 行)

『身とは殺・盗・婬、心とは諸の不善を念ずる～ 猶お猿猴の如く、亦獼猴の如く、處處に貪著して遍く一切の六情根の中に至る～ 八邪・八難中に經ざることなし。汝今應當に是の如き惡不善の業を懺悔すべし』 (四一四頁 一行)

―― 身の罪とは、殺生 (せっしょう)・偷盗 (ちゅうとう / 盗み)・邪淫 (じゃいん / 淫らな男女関係) です。心の罪とは、あらゆる悪いことを考えることです。～ 身と心の罪は、まるで猿が枝から枝へと飛び移るように、また、鳥もちがあちこちに引っ付くように、次から次へと執着の心が引っ付き、六根のすべてに毒気が沁み渡っ行くのです。～ その結果、八つの邪見《八邪 (はちじゃ)》と、仏を見ることもできず法を聞くことすらできない八つの苦難《八難 (はちなん)》に陥 (おちい) るのです。それゆえ身と心の悪業の懺悔をしなければならないのです。

身と心に罪を作っている凡夫は、以上の八つの境界を (『中に經 (へ) ざることなし』) で、その中を通り、必ずそういう世界に迷い込むというのです。もし我々が**反省**するということをしなければ、いつまでもその境界の中にいて、**向上の道**へ歩み出ることはないでしょう。それゆえ、**懺悔**が絶対に必要であると教えられているのです。

《思惟のひととき ⑥》

「**身と心の罪は、まるで猿が枝から枝へと飛び移るように、また鳥もちがベッタリとあちこちに引っ付くように六根の全てに行き渡り、ついには『八邪・八難』という苦と悪の世界の中に入り込んで行ってしまう。だからこそ『懺悔』が必要なのだ**」と庭野開祖は説きます。

―― この教示をどのように受け止めますか。かみしめてみましょう。

最高の懺悔

(P211・1 行／P172・6 行)

最高の懺悔はすべてのものごとのほんとうの在り方をとらえる**『諸法実相を観る』**ことにあるのだということが～ ハッキリと教えられています。

つまり、懺悔というものは、現象のうえの**自分の罪や至らなさを反省するところから出発**して、ついには大乗の教えの極致である**諸法実相の悟りにまで到達する**ために、菩薩行を積み重ねていくことなのです。懺悔とはこのように前向きの、そして非常に奥深い修行であることを、つくづくと悟らされます。

『一切の業障海は 皆妄想より生ず 若し懺悔せんと欲せば 端坐して実相を思え 衆罪は霜露の如し 慧日能く消除す 是の故に至心に 六情根を懺悔すべし』 (四一八頁 二行)

(P246・5行／P199・1行)

じつに美しい、尊い偈句(げく)です。短い言葉の中に仏教の神髄が尽くされています。この一句こそ、ぜひ暗記しておきたいものです。

海のように広がり満ちている人間の一切の業(行為)のあやまちも、～ **すべて妄想から起こるのである――** と(その原因を) **ハッキリ言い切ってあります。～ ですから、自分の業障を完全に取り除こうとするならば、～『諸法実相』に思いをこらさなければならない…と教えられているのです。**

法華三部経を貫く諸法実相

(P247・終2行／P200・1行)

なぜならこの諸法実相こそが、法華三部経全体を貫く根本の教えであり、一大真理真理であるからです。～ **こういうわけですからこの一偈(げ)(『一切の業障海は 皆妄想より生ず～ 至心に 六情根を懺悔すべし』)こそ、法華三部経の総しめくくりであると言っていいでしょう。**

「諸法実相」を深く思いめぐらす懺悔が『宿業』を滅する

『其(そ)れ衆生あって、晝夜(ちゅうや)六時に十方の佛を禮(らい)したてまつり、大乗經を誦(じゅ)し、第一義甚深(じんじん)の空法(くうぼう)を思わば、一弾指(いち たんじ)の頃(あいだ)に百萬億阿僧祇劫の生死(しょうじ)の罪を除却(じょきゃく)せん』 (四一九頁 終行)

一般の人々でも、昼夜に六回、仏を礼拝して、大乗経を読誦し、『諸法実相』の教えを深く思いをめぐらして懺悔するならば、指を一度鳴らすくらいの瞬間に、何億年の間、生まれ変わり死に変わりする間に犯してきた罪を(宿業)を滅することが出来るのです。 ※**参照**:レジメP25 **『最高の懺悔』**

第一の懺悔 三宝を謗らない

(P291・3行／P234・終2行)

『但當に正心にして三寶を謗せず、～ 是れを刹利・居士の第一の懺悔を修すと名く』(四二三頁 終三行)

在家の人は、どのように**懺悔**をすれば良いのかと言えば、いつも正しい心をもって、**仏・法・僧の三宝**を謗(そし)らず、出家者の修行の障(さわ)りになるようなことをせず、真面目に修行をしている人の精進を妨(さまた)げないことです。いつも**六法**(仏・法・僧・戒・施・天)を強く念じ、それらの道を修行することです。つまり、大乗の教えを行ずる人を供養し、感謝の心で礼拝することです。そして自らも深遠なる教えである**《空》、《諸法実相》**を深く思念することです。これが在家修行者の成す**第一の懺悔**の道であります。

第二の懺悔 親孝行と年長者への畏敬 (P293・2行／P236・5行)

『父母に孝養し、師長を恭敬する、是れを第二の懺悔の法を修すと名く』 (四二四頁 三行)

父母に孝行を尽くし先生や年長者を敬うこと。これが在家修行者の成す**第二の懺悔**の法です。

第三の懺悔 国を治めて人民を邪枉せざる (P293・終3行／P236・終2行)

『正法をもって國を治め人民を邪枉せざる、是れを第三の懺悔を修すと名く』 (四二四頁 四行)

第四の懺悔 不殺を行ぜしめ (P294・2行／P237・3行)

『力の及ぶ所の處に不殺を行ぜしめ～ 是れを第四の懺悔を修すと名く』(四二四頁 五行)

殺生が行われないよう努力すること。そして、あらゆる生命を尊重する思想を人々に広めること。これが在家修行者の成す**第四の懺悔**の法です。

第五の懺悔 因果・一実を信じ、仏の不滅を知る (P295・5行／P238・3行)

『但當に深く因果を信じ、一實の道を信じ、佛は滅したまわずと知るべし。是れを第五の懺悔を修すと名く』 (四二四頁 七行)

最後に、因果の道理を深く信じ、仏に至る一乗の道を信じ、久遠の仏はいつも自分と共にいて、決して仏は滅することはないと信じ、自覚すること。これが在家修行者の成す**第五の懺悔**の法です。この短い一節のなかに、**仏法の神髄**が尽くされていると言っていいでしょう。そして、**最高の懺悔**とは、つまりこのように**仏法の神髄を悟ること**にほかならないのです』」

《思惟の分かち合い ⑦》

『但當(ただまさ)に深く因果を信じ、一實(いちじつ)の道(どう)を信じ、佛は滅したまわずと知るべし。是れを第五の懺悔を修すと名(なづ)く』 ❶因果の道理を深く信じ ❷一乗の道を信じ ❸久遠の仏はいつも自分と共にいて、決して仏は滅することはないと知ること。この三つが在家修行者の最高の懺悔であると説かれています。

―― この経文の教えと自分の信仰姿勢と比べて、どのようなことが言えるでしょうか。ご自身を振り返ってみましょう。

観普賢経のまとめ

(P298・終2行／P241・3行)

「**懺悔とは、**つまり大乗の教えを学び、実践するところにある。いい加減なところで自分と妥協せず、あくまでも心の迷いや汚れを一つひとつ拭い去り、自分の仏性を磨き上げて行くところにある。そして、その極致は、法華経で教えられた**『諸法実相』**を悟るところにあるのだ。また、**人のため世のために尽くす菩薩行にこそ、懺悔の実践**があるのである」ということになります。

懺悔は宗教生活にとって欠くことのできぬものであります。我々は、このお経を繰り返し繰り返し読誦して、その神髄を悟り、日々実践してゆきたいものです。

《思惟の分かち合い　まとめ》

今日の**『仏説観普賢菩薩行法経』**の学びを通して、何を学び取ったか？
（または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか？）　振り返ってみましょう。

擱筆。３年の長きにわたって学び続けられた皆様の尊い求道のご姿勢に、心より感謝申し上げます。皆さまと共に学び合えたことは歓喜に満つ至上の宝です。至らぬ私ですが、これからも弛むことなく精進してまいります。心より篤く御礼感謝を申し上げます。　　編者　九拝

合　掌